

---

# Callin you

戸理 葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Callin you

### 【コード】

N5808Q

### 【作者名】

戸理 葵

### 【あらすじ】

ある日、幼馴染の浩輔が私の部屋に飛び込んできた。私が駅で泣き叫んで助けを求めているから、心配したのだと言う。でも私にそんな覚えはない。じゃあ一体誰が？彼と一緒にその謎の女の子を捜す私は、やがて受け入れ難い事実に向面する。

10話で終了予定の中編です。2日毎に更新します。

「おい、あさみ。・・・あさみつ。あさみつ。」

その日は大学の講義も無いので、普通に寝ていた。夕方からのテニスサークルには顔を出そうと思っていた。

大学3年ともなれば授業のコマ数も減るし、週3日に講義を集中させて週休4日のスタイル。

昨日は夜遅くまで友達とバカ騒ぎをしていたから。

「あさみつ。起きろってばっ。おいっ。」

ぐらんぐらんと揺すぶられる。弱冠の頭痛を感じた。二日酔いだ。

「んー・・・あ・・・え・・・浩輔??」

ぼんやりと目を覚ますと、目の前に眉毛を八の字に下げた浩輔がいた。

見慣れた、柔らかいカーブを描く顎。小さめの瞳。華奢な体。

およそ男らしい体格とは言えないこの幼馴染は、小さい頃からとにかくマイペースでいつも笑っているか、眠そうか、という表情をしていた。

それが、今は相当困っている、顔。

どちらかというと女顔のせいか、おかげで余計に頼りなく見える。

「・・・何？どうしたの・・・？」

私は思わずため息をついてしまった。

小さい頃からよく、私は彼の面倒を見てきている。だからつい、上から目線で話をしてしまう癖がある。

だけど浩輔はいつもニコニコ、私に近寄ってきていた。

高校生ぐらいになると私も、彼は一見頼りないように見えて、その実本当に頼りないのだけれど、本人はそれを良しとしていて案外肝が据わっており、なにより万人に分け隔てなく優しい、滅多にいない最高の男だ、と気付くようになっていた。

その最高の男が今、私を上から覗きこんで困り果てている。・・・少し焦っている？

「・・・あれ？何で浩輔、ここにいるの？」  
段々私は覚醒してきた。

「ここ、私の部屋じゃん。」

「おばさんがいれてくれた。」

「えー??何でー?」

「あさみがいつまでも寝てるから、俺が起こしにいったって、少しは恥をかけばいいのよ、とか言ってる・・・っていうかあさみ、本当に今まで寝ていたの？」

困り果てた顔の中に、信じられないって表情がありありと見える。

私は少し、いやかなり恥ずかしくなっていました。

時計を見ると、もう4時。あいたた、これは母親が怒るはずだわ。

「だって・・・昨日は夜中の2時まで可憐達と遊んでて・・・。」

「そうなの？それは良かったね。・・・でも、本当に寝てたの？ここぞ？」

「すみません。たまにはいいでしょ。眠かったんだもん。て何で浩輔にこんな言い訳しなくちゃいけないのよ。」

私は彼を見上げた。

今更スツピンを隠す仲でもないけど、21歳のうら若き乙女の部屋に当然の様に入りこむ神経ってどうよ？

幼馴染といっても男と女、一線を画すべきじゃないかしら？

という言葉はすぐに消えた。

小学校から大学まで同じ、所属するテニスサークルまで同じ、友達の部屋で飲む時は男女の隔たりなく何人も集まり、朝まで飲み明かす中。

そのままみんなでごろ寝、なんて事も両手では足りないくらいの回数を重ねている。

もちろん、グループ内で間違いが起こった事は一度も、ない。

特に私達二人の間柄は皆知る所。ぼんやりとした浩輔と、そのの世話をする羽目になる私。

お互いカレカノがいた時期もあったけど、この関係が崩れる事は無かった。

「本当に一日中ここにいた？」

「いたよー。どうしたの？何を確認したいの？私がいかに怠惰な生活を送っている事に、苦情を言いに来たの？わざわざ？」

「そうじゃねえよ。」

彼は頭をガシガシと掻くと、ほとんど困り果てた様な顔をして、床に胡坐をかいて座り込んだ。そして頭を抱えて俯いている。

「……どうしたの？」

「……本当はあさみ、信濃町にいたでしょ？」

「……はあ??？」

「信濃町の、総武線のホームにいたでしょ？」

「私が???.いいえ？今日？まさか。」

私はTシャツ姿に下はスウェット、で浩輔と同じように胡坐をかいた。ただし、ベッドの上で。

（もちろんノーブラだけど、あまりの驚きにそのまま起き上がったしまった。）

「私の記憶が正しければ、わたくし、ずっとこのベッドにおりました。」

「嘘だよ。」

間髪いれずに浩輔が言う。  
顔をあげて、珍しく私を鋭い目で見た。

「絶対嘘だよ。いたよ、信濃町に。なんで隠すんだよ。」

「え？いないよ、マジで。ホントに。いるわけないじゃん。何、どうしたの？何かあったの？」

「それを確認しにきたんだよ。」

困ったように、怒ったように、拗ねたように、信じられない様に、私の目を見る。

「駅であさみが泣いているのを見たんだよ。だからビックリして来たんじゃないか。」

「・・・ええー??嘘でしょ?私、そんな事してないよ!」

「あれはぜったいあさみだった!」

更に珍しく私に大声を出すものだから、私は心の底から驚いてしまった。

この人、何かに怒っている?というか、私に怒っている?え?何で?私、怒られる様な事をした?

「あさみが、俺に向かって泣きながら叫んでいたんだ!俺、見間違っただけじゃない!あれはあさみだった!」

「・・・えええ??泣き叫んでいたあ??私が?駅で?」

「そつだよ!俺、ちゃんと見たんだかな!」

開いた口が塞がらない、とはまさにこの事。

私は頭の中が真っ白になってしまった。

私が？寝ている間に？駅に行つて？泣き叫んだ？浩輔に??

「俺が電車に乗つてドアが閉まる時、ホームにいるあさみが泣いているのを見たんだ。声はよく聞こえなかったけど、あれは叫んでいた。」

浩輔は断言した。

私は未だについていけず、浩輔を疑うか、浩輔の頭を疑うか、で迷つていた。

これは仲間内の、新手のゲームなのかしら？

それにしても彼の瞳が少し潤んで見えない事も無く、無駄に演技が上手すぎない??

7

「……えつと、それ、……人違いじゃない？」

「だから違つて言つてんじゃない。長い付き合いのあさみを間違えないだろ。」

ぼそぼそとしたいつもの口調に戻り、見慣れた八の字眉で私を見るけど、彼が自分の発言を撤回する意思が無い事はハッキリと見てとれた。

私を見間違える訳が無い、と断言をしてくれる事は、心のどこかが少し熱くなるくらい嬉しい事なのだけね。いやだつて私、ここで本気で寝ていたし。

「・・・じゃあ、ドツペンゲルガー？」

「そんなのいるのかよ。」

「だって見たんでしょ？でも私ここで寝ていたもん。じゃあ、私の生霊。」

「・・・あさみ、本気で考えていないでしょ。」

「・・・。」

「そして信じてないでしょ、俺の事。」

「・・・だってええ・・・。」

今度は私が、浩輔に負けなくらい眉毛が下がってしまった。

どうすればいいのよ、これって。わーい、騙されたーっ、ってバカにされるのを覚悟で信じるフリをすればいいの？それとも、性に合しわない事をしないの、って叱り飛ばせばいいの？

それとも、この人の頭の中身を本気で心配すればいいの？

「・・・助けて、って言ってたんだ。」

浩輔が下を向いて、ボソツと言った。

「行かないで、とも言っているように聞こえた。俺の名前を呼んでいた。・・・なのに電車のドアが閉まっちゃって・・・俺、泣いているあさみをホームに置いていつちゃったんだ。」

純粹で優しい幼馴染は、小学生の頃と変わらない雰囲気と口調で話す。丸まった背中。可愛い顔での困った表情。

華奢な体はとも21歳の男には見えないけど、これが意外、テニスはサークルで一番の腕前だ。

敏捷な動きと的確なサーブ。テニスをする時の彼は、本当に別人。

輝いて見える。

ま、スポーツ全般、何でもできるオールマイティなだけれどね。

「……それで、わざわざ来てくれたの？」

「何度も電話しても出ないし、マジでどんなトラブルに巻き込まれたのかと思って、スゲー心配したんだぞ。」

そう言っつて、顔をあげた。

「ホント、焦った。」

「……。」

ドキツとして、顔が赤くなりそうなのを慌てて隠すべく、目を反らす。

確かに携帯の電源を切っていた。それも確信犯的に。だって誰にも睡眠の邪魔をされたくなかったんだもの。

それがこつこつという結果を生むとは。なんだか申し訳ない気分になってきた。

でも、よくよく考えてみれば、悪いのは私ではなくてその謎の女の子。

泣き叫ぶ？信濃町のホームで？あり得くない？

「……浩輔さあ。悪いけど、人違いだから。」

「だって俺の名前を呼んでいたんだよ？人違いつつても、そうそういないだろ、そんな。」

浩輔が唇を尖らせて私を見た。

「どういう事？」

「私に聞かれても……。」

二人で途方に暮れてしまった。

「……でもそれって、私でないからつまり、浩輔の知り合いの誰かが、あなたに助けを求めていたってこと？」

眉根を寄せて私が言うと、今度は浩輔がポカン、とした。

「え？そんな事あるの？」

「て、自分が持ち込んだネタでしょう？疑ってどうするの？」

「だって俺はあさみだと思ったから。」

「だから私は一日中ここで寝てたんだってば。ドツペンゲルガーと生霊説を否定されたら、あとは別人説か、浩輔頭にキちゃった説を唱えるしかないでしょ。」

そっいつて私は彼を軽く睨んだ。

「まさかと思うけど、信じているけど、寝ている私を叩き起こしに来た単なるゲームのパシリだった、とかだったら、本気で怒るからね。絶交だかね。」

「ナイナイそれはナイ、マジでないっ。」

彼は焦って、右手を顔の前でぶんぶん振った。ふーん、ならいいけど？

「じゃ、私に似た誰か？それで浩輔の知り合い。浩輔って呼んだの？だったら親しい人よね。」

「お前を間違えねーと思うんだけどなあ……。」

「諦めてよ、それは。それとも私の生霊がいた方が嬉しいの？」

「え？嬉しいって……。」

浩輔は驚いたように言葉に詰まった。それを見て、私は少し溜息をついてしまう。この子は時々素直すぎる所があつて、年甲斐もない（？）その純粹さに最近では呆れているから。

「そこでイチイチ詰まらないの。誰か心当たりいない？」

「いないよ、そんなの。」

そういつて眉間にしわを寄せる。

私も彼と一緒に、眉間にしわを寄せて考えた。

「元カノとか。」

「あり得ない。絶対違う。」

即、否定をしてきた。断定だ。

「一応、電話してみなよ。」

「えー……。」

心底嫌そうに、まるで小学生がするように再び唇を突き出して私を見上げてきた。

本当に子供みたい。こんな人が小学校の教員免許を取ろうとしているんだから、合っているのか不安を覚えてしまう。

「そんなに切羽詰まって私の部屋に押し掛けるくらいなんだからさ、何か大変そうだったんでしょ？その彼女に電話してご覧よ。」

普通ね、女の子が助けを求める相手って、それが男なら、彼氏とかだもんね？

私はベッドから彼を見下ろした。

浩輔はしばらく考えたのち、がくつと肩を落とし、より一層小さくなつた背中でボソボソと呟いた。

「・・・やだなー・・・。怒られそう・・・。」  
「相変わらずのヘタレっぷりね。」

頼りない所に母性本能をくすぐられるのか、スポーツ万能のギャツプに惹かれるのか、幼い女顔に惹かれるのか、浩輔は過去にも何人が彼女がいた。ただし、一年持ったためしがない。

告られて、振られ、告られて、振られ、の繰り返し。まさに来るもの拒まず去る者追わず、なのだ。

そして、どの彼女も例外なく、気が強くて浩輔を尻に敷く。いや、敷いていた。

浩輔はしぶしぶ携帯電話を取り出すと、目で私に確認し、目で私に催促され、嫌々ながら電話をかけた。

その後ろ姿、ちょっとウケる。

なんて思う私は、最近彼にヤラれている自覚が、ある。

つまり、好きになりかかっているって事。

10年以上も友達をやっている。今更ながら。

どうしてなのか、自分でもわからない。なのに、彼に触れなくなる。可能性なんて低いし、長く続いたこのぬるま湯の様な関係を壊したくないのに、

キスを、したくなっている。

浩輔は背中を小さくして電話をかけた。

つながったのだろう。体がビクツと飛び上がった。小動物みたい。怯え過ぎだつて。

「もしもし・・・あ、俺、だけど・・・。」

ビクビクしている。本気で怯えている。一体、直近の元カノにどんな仕打ちを受けていたのかしら？

「えっと・・・望美ちゃん、さ、・・・今日、信濃町にいた・・・？・・・あ、いや、そう言う事じゃなくて・・・いや、違うんだけど・・・あの・・・いや・・・。」

あつという間に通話終了。浩輔は怯えた表情そのまま、口を開けて目を見開き、しばらく呆然として固まっていた。

「・・・切られた。」

うん。それって、見ればわかるよ。

「で？」

一応、聞いてみる。でもどう見ても、泣いて助けを求めた相手に対する電話の切り方じゃ、なさそうだったけどね。

「携帯の番号、消せって言われた。」

そっちな。

「あら。そう言えば消してないわね。なんで？」

「忘れてたから……って、電話しろって言ったの、あさみじゃん。」  
私を見上げて泣きそうな顔をする。情けないなあ、もう。21の男でしょ？すっかりしなよ。

私は浩輔を無視して考えた。

「違うとなると……誰だろう？……あ、由佳は？」  
「由佳？」

浩輔が素っ頓狂な声をあげた。私は少し首をかしげた。

「ここ半年、会ってないでしょ？」

「そうだけど……だからって間違えるかなあ？」

「浩輔を下の名前で呼ぶ女の子って、数少ないじゃない？由佳、私と背格好もあまり変わらないし。見間違えた、とかない？」

「ないと思うんだけど……。」

言葉は不安げだけど、彼の視線は強くしっかりと私を見上げてきた。その眼差しに、ドキツとする。浩輔が最近よく見せる、男らしくて力強い瞳だ。

私は心臓が高鳴りながらも、その視線から目を反らせなかった。だつてこの表情に惚れた様なものだから。

「ホントに、あさみじゃない？」

一瞬見つめ合って、私は息を飲んで、やっと一言。

「つづいよ。」

ああ、色気の無い返答。

すると彼の表情が一転、いつもの八の字眉に戻った。

「・・・俺、なんか、かけるの照れるから、あさみがかけてよ。何喋っていいのかわからないよ。」

母性本能がくすぐられるらしい、って。

くすぐられているのは、この私。

「・・・はいはい。」

溜息をついて見せるけど、多分あなたの頼みは何だって聞いてしま  
うのよ、きつと。

現に今だってこうやって、可愛げのない態度で荒唐無稽な話に付き  
合っている。

なんて可愛げのある私。

コール10回。もういい加減諦めようか、とした時に電話が繋がっ  
た。

「もしもし？由佳？」

『もしもしー！あさみー？どしたのー？』

すっごい大声。充分聞こえるのにそんなに怒鳴るとは、多分、向こ

うがうるさくて聞こえづらいのだろう。

「んー、特に。今、どこ？」

『今、カラオケボックス！！』

成程。それは確かにうるさいところね。

彼女のバツクから、色々な部屋の歌声が聞こえる。カラオケボックスの独特の雰囲気伝わってきた。

そして由佳は、どうやらすごくテンションが高いらしい。高揚した気分も伝わってきた。

『どうしたの？何か用？』

その一言でわかる。電話をかける相手を、間違えた。

浩輔に目で合図を送る。彼は無言で肩をすくめて見せた。

しょうがないので私は、わかりきっている質問を投げかけてみた。

「用っていうか……。由佳、今日の昼間、どこにいた？」

『昼間？昼間っからカラオケだよー？もうぶっ続け、4時間目に突入！』

4時間目???

「ええ？すごいね??何人で歌ってるの？」

『えーつと・・・あ、15人！！』

15人???

私はビックリした。一体何の集まりなの？

由佳は私と浩輔の幼馴染。といってもつるみ始めたのは中学に入ってからで、彼女とは高校も大学も違う。

それでもマメに連絡をし合ってよく飲みにも行っていたので、お互

いの近況は手に取るようによくわかっていた。

『ほら、この間話していた、大本命がいるのっ!』

「え?・・・ああ、一個上の先輩?由佳がお気に入りなの?」

私は納得した。

由佳は昔から恋に生きる女で、常に誰か、憧れの彼を追いかけている。

今はそれが、確かバイト先の先輩だったはず。ジャーズの山下くん似で劇的にカッコいいらしいのだけど、そんなヤバい人、そうそういないって。

すごく興味があって見てみたいのだけれど、絶対後悔しそうで、写真すら見せて貰った事が無い。

『そうなのっ!なんかチョーいいカンジでねっ。もう、どうしようっ!』

へえー。山下くんといイカンジ、とね。それは引けないよね?私でも食い下がるよ?

「・・・楽しそうだね。」

『すっごく!ヤバい!』

電話の向こうの彼女は、すっかり舞い上がっていた。

浩輔を見ると、彼は所在無さげに胡坐をかいて座り込み、ほっぺたを指でぽりぽりかいている。

ちよっぴりかわいいな。

「念のため聞くけど、今日、泣いたりした？」

そんな彼を横目に観察しながら、私は本題を聞いた。もちろん、答えは解りきっている。

『え？何の事？泣く？』

「そう。例えば、駅で、とか。」

『そんな事してないよー！あ、でも、先輩と二人で帰れたりしたら、嬉しすぎて泣くかも！』

ああ、恋する乙女の毒気にやられた。同い年で私だって恋しているのに、このテンションの差は、何？

「・・・はい、わかりましたー。ごめんねー、邪魔して。」

『え？何？おしまい？』

「うん。楽しんでね。早く先輩の元にお帰り。」

『あ、でもねでもね。先輩たち4年組はなんか次に行くみたいなんだよね。あたし、なんか入りづらくって・・・。』

・・・何ですか？

このタイミングで、その勢いと流れで、このぬるい私に、恋の相談ですか？

本気ですか？それとも、アテているだけですか？

「・・・うーん・・・。」

『ねえ、あさみ。どうすればいい？』

「・・・うーん・・・。」

私は俯いて、眉根を寄せて、ベッドの上で胡坐をかいている自分の

足を見つめてしまった。一体、どうしましょう？  
その時、顔の横に何かが触れた。

「由佳ー。」

途端に、心臓がドキッと跳ね上がって、ついでに携帯を持つ手が大きく揺れた。

だって浩輔が、綺麗な頬を私にくっつけて、私の携帯に反対側から耳を寄せているのだ。

私が揺れない様に、肩の付け根に脇の下から手を入れてしっかりと掴み、携帯の会話を反対側から聞いている。

私と浩輔の頬は、ぺたっとくっついている状態。柔らかいその感触と彼の整髪料の香りに、私は呼吸が出来なくなった。

ど、どうしよう。

『あれ？浩輔？いるの？』

「うん。たまたま。」

いつもの呑気そうなユルい声。

たまたま、な訳ないでしょ、と思いつつも、人を安心させる彼の声に胸がときめいてしまう。

近いよ、近すぎるよ。嬉しすぎるけど、ヤバいでしょ、これは。

だって彼もベッドに腰掛けていて、私はノーブラTシャツ一枚、ですよ？

・・・ああ、その気があるのは私だけ。まるでお姫様を狙う狼になった気分だわ。

「由佳！。好きならついて行けば？見込みありそうって言ってたじやん。」

『まあ、そうなんだけど・・・。』

もちろん、由佳の恋愛事情は浩輔の知る所、でもある。由佳は誰にも隠し事は一切しませんからね。

「好きならどこまでもついていったら？気がある男なら、嬉しいよ。頑張れ！」

『・・・ホントに？ウザくない？』

「それでウザがる男なら、もうやめちゃえ。由佳には会わねえよ。」

『そっか・・・。・・・そうだよね。』

「そうだけ。行っちゃえよ。由佳らしく、突っ走れ！」

『わかった！！そうする！！じゃあね！！』

由佳は晴れやかな声を出した。そして元気よく、携帯が切られた。しばらく、その機械音を二人で聞いてしまう。やがてお互い無言で、携帯から耳を離れた。

間近に、浩輔の、顔。

二人とも、ベッドの上。

一瞬、彼の綺麗な唇に目が釘付けになった。

この唇に、キスをしたら、どんな感じだろう。

「・・・なんて素晴らしいアドバイス・・・。」

そう言いながらなるべく自然に視線を反らし、正面を向いて溜息をついてみせた。

すると浩輔は嬉しそうに言った。

「・・・そう？へへ。そうかな？」

「青い春、略して青春、をしていたよ。」

「そうだねえ。」

「全然、泣いて無かったね？」

「だから俺、最初っから由佳じゃないって・・・。」

「あんたは最初っから、私だって言ってるんでしょ？」

ジロツと横目で彼を睨む。ごめんね、これって八つ当たりよ。

普段でも割と我慢して気付かないフリをしているのに、このまったりとした寝起きの夕方に、人のベッドに侵入してくる時点でもう、あなたは私に犯罪を犯した様なものなのよ。

私ばかり、誘われて、惑わされて、嫌になっちゃう。

私は考え込むフリをした。

「ねえ、可憐とかは？」  
「可憐？」

浩輔は相変わらずベッドに腰を下ろしたまま、ボーっと私を見る。

「ああ……。違うと思うけど……。でも一番あさみに似てるかも・  
」

その台詞に私はビククリして振り返ってしまった。

そして再び真正面から間近に、彼の瞳を見てしまう。もう一回ドキ  
ツとした。

でも可憐って、かなり美人の部類に入る、華やかな女の子のはずな  
んだけど？その子と私が似ているなんて考えられない。

「え？あの子が？……。うそー。」

「うーん、何となく。雰囲気か？」

雰囲気？余計違うじゃん。

私、あんなに可愛くないよ、とは何故か恥ずかしすぎて言えず、

「……。私、あんなに性格キツくないよー。」

「あはは。それは言える。」

浩輔は面白そうに笑った。赤くなる、私。人の気も知らないで。

可憐は私と浩輔の大学のテニスサークル仲間、美人の割にはサバ  
サバした性格で気があってよく一緒に飲んでいる。

ていうか私、今朝まで一緒に飲んでいたわ。

気を取り直して、私は彼女に電話をした。今朝の様子じゃ、何もトラブってはいなさそうだったけどね。多分これも、無駄足ならぬ、無駄電。

コール5回くらいで、可憐が出た。

「もしもし？可憐？」

『あ、あさみ……。』

「あのね、可憐……どうしたの？」

ビックリした。だって電話から伝わる雰囲気、いつもと違う。思わずシリアスな声を出してしまった。

私の様子が変わったので、浩輔がじつとこちらを見つめる。

『……。』

「可憐？どうかしたの？」

『何でも……。ないっ。』

声が詰まっている。明らかに泣いている。

私は一気に緊張してきた。

浩輔の台詞が、にわかには現実味を増してきた。

「何でも無くないじゃん、どうしたの？今、どこにいるの？」

『……。部屋……。』

「一人？」

『うん。』

「今行くから。15分待って。」

『え？』

可憐の返事を待たずに電話を切ってしまった。

緊張で、胸がドキドキする。駅で泣いていたのは可憐だったの？

「可憐、泣いてた。あの可憐が、泣いてた。」

「そっか。え？大変そうだったの？」

浩輔の様子は、可憐が泣いていた事よりも、私の真剣な面持に驚いている様。

「わからない。でもあの可憐が泣くなんて。」

「それって、光に任せた方がいひかるいんじゃないの？」

光とは可憐の彼氏で、二人は大学に入学して間もなく付き合い始めた。だからもう、結構長い。

光も誰からも好かれる気さくな男で、背格好も結構イケてる為、女の子達からの人気も高かった。

つまり、美男美女カップル。

おまけに頭もいいものだから、光に任せた方が、という浩輔の気持ちにはよくわかる。

でもね。

「だって浩輔に助けを求めていたんでしょ？」

「え？・・・ああ、まあ。わかんないけど。」

なんでそこで曖昧になっちゃうのかな？そして俯いちゃうのよ？

すごい剣幕で私の部屋に押し入ってきたのはあなたなんですよ？  
おかげでしなくていいドキドキまでしてしまって、色々虚しいんだ  
からね、私はっ。

「今すぐ行くっていつやったもん。行くよっ。」

「え？あ、はい。」

私の勢いをどう解釈したのか、浩輔は慌ててベッドから立ち上がり、  
私を見つめた。

「・・・なんで突っ立ってるの？」

「え？」

「私、着替えるんだけど。」

「あ、ごめんっ。」

慌てて部屋を出ていく。

・・・私、このおトボケ鈍感男に一生付き合っていくのかあ。疲れ  
るなあ。

再び溜息をついて、クローゼットを開けた。

チユニックにジーパン、という普段着に着替えて、それでも鏡の前で髪を整えて、

一瞬、肩まで伸ばした髪をどうアレンジしようか迷ってしまう。

もう、寝起きのスッピン、どこるか寝顔さえ見られている事に気がついて、気分が萎えてしまった。

それでも、ムースを付けてバレッタで止めて。リップの上からグロスを塗って。

長年の幼馴染というポジションでも、せめて彼の自慢の幼馴染になれる様に。

外に出ると、彼は家の前に止めてあった自転車に跨っていた。

もう3年は乗っている愛車だけど、黒いだけのタダのママチャリ。毎日家から駅までの往復にしか使用していない。

あ、それと私の家に来る時。

つまり、その後ろの荷台は・・・

「ほら。乗ってよ。」

私しか、乗せていない・・・ハズ。

元力ノ達を、駅から家まで乗せた事があるなら、話は別だけど。

「・・・そろそろ、もう少し乗り心地の良いものを買って替えて欲しいなあ、なんて・・・」

「おう。検討するぜ」

「言葉ばかり」

カッコつけてニヤツと口角をあげて微笑む浩輔に、私は呆れてみせて、馴れた手つきで後ろに乗った。

彼は勢いよく、自転車をこぎ始める。

私は彼のサドルをギュツと掴む。

何度も何度も乗っているのに、私が手を伸ばせるのは、いつもここまで。

そして浩輔は、いつも楽しそうに自転車をこぐだけ。

可憐の家は、正確には一人暮らしの部屋なのだけけれど、自転車で5分ちよつとで着いた。

二人して少し緊張して、ドアベルを押した。すぐに扉が開く。

「可憐」

可憐は今朝別れた時と違って、随分疲れて見えた。

よく見るとアイメイクが全部落ちている。そのせいか、まぶたがひどく腫れぼったい。

「あさみ・・・え？浩輔も？」

彼女は私の後ろにいる浩輔を見て、驚いたように目を見開いた。すると彼は申し訳なさそうにボソボソつと言った。

「ごめん。俺・・・すぐ帰るから」

え？ちょっと、あなたのおかげで私達、ここに来ているんでしょ？  
当事者が逃げてどうするのよ??  
ビククリして振り返ると、浩輔の瞳がうるたえていた。

無言で訴えかけてくる。俺、女の子の修羅場って、苦手。

だから私も無言で彼に訴える。当り前。でも逃げるのは許されない  
わよ？

「あ……とりあえず、どうぞ」

そんな私達の無言のやり取りを眺めて、可憐は少し戸惑った様に玄  
関に入れてくれた。

私の後ろから、浩輔がしぶしぶ入ってくる。どこまでヘタレなのか  
しら。

「……どうしたの?」

1LDK。玄関を入るとすぐキッチン。奥にはベッド。中央に小さ  
な丸テーブルとビーンズクッション。

可愛らしくデコレーションされた部屋に私は正座をして、可憐に話  
しかけた。

浩輔は、なるべく隅に隅にと隠れて(?)行き、ほぼキッチンの下  
に座っている。怯えているリスかネズミみたい。

「うん。・・・あたし」

口を開きかけた可憐は、突然言葉に詰まった。

次の瞬間、両手に顔をうずめて泣きなきだした。

「別れようって言われた・・・っ」

私と浩輔は、予期せぬ台詞に固まった。

「え？光に??？」

「・・・うそ。何で?？」

キッチンの隅っこから浩輔の問い掛けが聞こえてくる。遠すぎます。こっちにくれば?？」

可憐が肩を震わせながら答えた。

「他に好きな子がいるって・・・あたし、二股かけられていたの」

「えーっ!!!」

「いつから???!!!」

後ろから浩輔が身を乗り出して聞いてくる。だから遠すぎます。そんなに聞くならこっちにくれば?？」

可憐は両手を顔から離し、しばらく俯いていた後、声を絞り出すように話し始めた。

「・・・わかんない。・・・多分、去年の秋くらいから・・・」

私も浩輔も呆然となって彼女の台詞を聞いていた。

だって、信じられない。可憐と光は見た目が良いだけでなく本当に仲が良くて、お互いのノリとツッコミも絶妙で、理想のカップルだったのだ。

3年以上に及ぶ長い付き合いによる信頼感、というものが、二人の間には滲み出していた。

お互いを尊重し合っていて大切に合うその姿に、多分誰もが、この二人はいつか結婚をするのだろう、と思っていたのに。

まさか、光が浮気?!そして二股?!

俯いた可憐は、涙を堪えながら話を続ける。

「あたし・・・なんとなく気付いていたんだけど・・・。今日、光の携帯を見たの。そしたらね、女の子から変なメールが入ってて、それで・・・問い詰めたら・・・」

「・・・変なメールって?」

「おい、あさみ。」

私の質問に、浩輔が後ろから止めに入った。見ると眉根を寄せている。

突っ込みすぎ?デリカシー無さ過ぎた?

浩輔は時々、こうやって私を諭してくる。

可憐はそんな私達に特に注意を払う事なく、消え入るような声で言葉が続けた。

「あいつ・・・この間の旅行、由樹達と行くっていったのに本当は、その彼女と二人で行ってたのよ・・・」  
「えーっ！！何それっ？」

私は思わず大声をあげてしまった。由樹とは同じサークルの同じ学年の仲間。いわば飲み友達の一人。

光が可憐を騙してまで別の女の子と旅行に行っていたなんて、あまりの出来事に私は大ショックを受けた。

しかも由樹の名前を使うなんて、それってつまり彼も共犯って事？

いつのまにかキッチンから弱冠こっちに移動してきた浩輔も、つぶらな瞳を見開いて、口は驚きを表している。

「それ、初めてなの？」

息を飲んで私が尋ねると、可憐は相変わらず俯いて答えた。

「わかんない。こうなるともう、彼の何を信じていいのかわからない。由樹達もこれを知っていたのかと思うともう・・・サークルにも、行けない・・・」

「・・・」

再び涙をポロポロ流す彼女。私はあまりのショックに言葉が出なかった。

自分の理想が、崩れていく感じ。そりゃ、勝手に理想にしていただけなんだけど。

「あつちの女の子の方が実は好きなんだって。もう、あたしよりあつちに気持ちが向いているんだって。」

「……」

・・・そんな。

いつかの、可憐の笑顔を思い出した。

隣で、愛しむように微笑む、ハンサムな光の顔も思い出した。

何が悪かったって言うんだろう？

こんな裏切られ方。酷いよ。

神様。可憐はすごいいい子なんだよ？

神様。実は光は最低な奴だった、なんてあんまりじゃない？

「あたし、悔しくって、悲しくって、それで・・・悔しくって・・・  
っ！」

「ひどい。なんて事。許せないよっ。」

私は我慢出来なくなって、思わず可憐の台詞を奪ってしまった。  
興奮して、熱くなってしまう。ちよっぴり目が潤んできた。

「光も由樹もひどすぎるよ。可憐の気持ちを踏みにじってる。こん

な人達だと思わなかった。信じられないっ」

「あさみ。由樹が関わっているとは限らないだろ」

浩輔が後ろから、私をたしなめるような口調で言ってきた。

私は勢いよく振り返り、ムキになって反論した。

「口裏合わせているよ、きつとっ。でないよ、名前を出さないじゃん」

「でも、口裏合わせていても、光が他の女の子と旅行に行った事までは」

「浩輔！」

「あ、ごめん・・・」

今度は浩輔の失言。打ちひしがれている可憐の前で、そんな事を再確認させてはいけないでしょ？

浩輔は小さくなって引つ込んだのだけれど、目が、何だかまだ納得いかない、って言っている。

少し気ぜわしげに、私と可憐を交互に見ている。

「もう、信じられない。騙された・・・。悔しい。こんな奴と付き合っていたなんて、自分が情けない」

「本当だよ、可憐の言う通りだよ。光は酷過ぎるよ。私も、光がそ

んな男だったとはビックリした。可憐は悪くない」

私は彼女の両腕にそつと手を置き、彼女の瞳を覗きこんだ。

力強く、でも落ち着いて、彼女の心を少しでも慰めようと試みた。

「そんな奴、別れて正解よ。すこし落ち着いて、ね？光の事なんて忘れて・・・といつても無理だろうけど。でも、悪いのは光だから」

「そうよね・・・3年も付き合っていたのにこんな騙し方をするなんて。しかも二股だなんて、酷いよね。あんまりだよね？」

「そうだよ。可憐は被害者だよ」

「・・・そうかな？」

私が力強く頷いた時の、後ろからの反論。  
思いがけない言葉に私は驚愕した。

「え？」

信じられない思いで振り返ると、浩輔は正座をしたまま、何故だか眉間にしわを寄せていて下唇を突き出していた。

「いや・・・さっきから光ばっか悪くいうけどさ・・・本当に、そうなのかな？」

「何よ？ それって、浩輔は可憐も悪かったっていつの？」

「うん」

ええ？

耳を疑う。

「な、何言ってるのよ？」

相変わらず浩輔は難しい顔をして座っている。

私は蒼白な顔をして呆然と座り込んでいる可憐の顔色をうかがいながら、慌ててしまった。

「どう考えても光が悪いでしょ？騙してたんだよ？内緒で他の女の子と旅行に行ってたんだよ？二股かけていたんだよ？なんでそれで可憐が悪いのよっ？」

「可憐悪いって言うか……。」

浩輔は俯き、ぽりぽりと頬を掻きながら、自信がなさそうに呟く。  
ちよ、ちよっと、そんなに自信が無いなら妙な事を言わないでよっ。  
今、ここです。

「可憐は悪くないよ？でも……それなら光も悪くないんじゃない？もし光が悪いんなら、多分、可憐も悪くなるよ」

「え？意味が分からない。」

「うーん・・・なんて言えばいいのかな・・・？」

相変わらずキッチンの床に正座している彼は、腕を組み首を捻りだした。

「恋愛つて、対等でしょ？」

眉間にしわを寄せ、何を言おうか一生懸命考えている。

口下手な彼にしてみれば、相当な事。

私はまたまた、心底驚いてしまった。

「お互い大人で、自己責任を持ちあうからの恋愛でしょ？友達だつてそうじゃん。自分が相手を選んで、相手に選んでもらって、恋愛をやったり友達をやったりするんだろ？それってお互いの責任じゃん」

「・・・浩輔・・・。」

「それに、光と可憐は3年以上付き合っていたんだろ？そうしたら、上手く言えないけど、もうどっちが悪いとか被害者なんて言えないと思うよ？」

一言一言、考えながら、噛み締めながら続ける。

「もちろん、浮気をしたのは光だよ。でも……そういう光と可憐の関係を作り上げたのはお互いの責任だって事で……」

そう言っただけは、小さな丸っこい目を真っ直ぐに可憐に向けた。すごく真摯な眼差し。ドキツとした。

「自分を責めろ、って言ってるわけではないよ。でもね、可憐。相手ばかり責めて否定していたら、それこそ自分が可哀そうだよ。可憐はこの3年間、一生懸命恋愛をしていたんでしょ？楽しかったし、色々……学んだんでしょ？」

そして次の瞬間、彼はふわ……と笑った。

男の子の微笑みなのに、ふわ……と。

それは多分、彼の周りの空気を、その場にいる全ての人の空気を、優しく変える微笑み。

「光と可憐は対等なんだから。それは、可憐は被害者ではないし悪くもないし、負けてもない。そういう関係に育ったって事だよ。二人の共同責任なんだ」

柔らかい微笑み。

なのに、瞳の奥には強い光。

「だから、そんなに落ち込まないで？」

どうしよう。

私はこの幼馴染に、今度こそどうしようもなく惚れてしまった。どうしよう。

この微笑みに、眼差しに、その言葉に。

浩輔・・・いつのまに大人になっていたんだろう？私なんか、とっくに抜かされている。

39

「・・・そうか・・・」

可憐が私の隣で小さく呟いた。

「悔しいならさ。納得がいかないなら、もう一度光と話してごらんよ？きつと今より、自分の中で納得がいく答えが見つかるよ」

柔らかい微笑みで、心に染みいる声で浩輔は語りかける。

可憐はそれに促されるかの様に、先程までのとげとげしさが嘘の様に、掠れた声で呟く。

「……でも……しつこい、とかウザい女だと思われたらどうしよう……」

「安心しろよ」

ここで初めて、浩輔は立ち上がって可憐の側に来た。

片膝をついて座ると可憐の顔を覗きこみ、女の子みたいににこっと笑った。

「可憐は、すごく可愛い女の子だと俺は思うよ？性格だって可愛いし、とてもいい子だよ。だから大丈夫。ちょっとくらい相手が困っても、きっとそれも恋愛だよ」

「……ごうすけえ……」

可憐が再び涙を浮かべる。でもその涙は、私に見せていたものとは質が違う。

「うわーん、ありがとう……」

「よしよし。可憐はいい女だ」

浩輔の首に抱きつく可憐を、彼はニコニコと明るく受け止めた。背中を軽く、ポンポン、と叩く。

そして彼女に優しく囁いた。

「泣いてばっかじゃ、もったいないよ？」

私はそんな彼に見とれていた。

小さい頃はただひたすら、気が弱くて無口な男の子だったのに。  
私の言う事を何でも聞いて受け入れて、いつもニコニコ笑っている  
だけの困った男の子だったのに。

いつのまにか私より足が速くなって。  
いつのまにか私より背が高くなって。  
いつのまにか私より声が低くなって。

いつのまにか、他の誰よりも優しく人を包み込める包容力を持っている。

頼もしくて、力強くて、なのに見ていてどこか切ない。

どうしよう。この人が、好きだ。

どうしようもなく、好きだ。



軽く可憐の頭を撫でながら。

浩輔が、軽く言った。

「ところで可憐。今日、昏間に信濃町にいた？」

え？今、このタイミングで聞くの？うわあ、びっくり。

「え？しなのまち？」

可憐が顔をあげて、きょとん、と聞く。

「うん。信濃町」

浩輔が可愛い笑顔で、にっこりと言う。

「いないよ？だってずっと部屋にいたもん。ここで修羅場してたから」

「そっか」

「何？どうかしたの？」

「ううん、何でも無い」

ニコニコと答える浩輔。優しく可憐を慰めながら、目的達成。

・・・やっぱ頭の中は、ちゃんと男の子なんだなあ。冷静？合理的？あ、さっきの演説（？）は理論的、ってヤツだった。

私は少し感心して（少し呆れて）彼を眺めてしまった。

落ち着いた可憐を部屋に残し、私達は外に出た。自転車を何となく押し、二人して無言で歩く。可憐と光、こうなったらもう、どういふ形であれ落ち着くといいなあ……。

でもやっぱり、少し落ち込む。

しばらくして私は、隣の浩輔を少し横目で見ながら、言った。

「確かに素晴らしい働きを見せました、浩輔さん。確かに可憐さんは貴方に救われたようです……ですが」

「違いましたね」

「違いましたね」

二人で難しい顔をして、イヤに真面目なフリをして頷き合う。そして私は、少し上目遣いになった。

「やはり思い違いでは？」

「それはナイ」

「えー」

もつとつして、「この質問になると即答するのよう。

「じゃあ、誰よ？」

「うーん・・・俺は思い浮かばないよ。あさみ以外」

「あのねえ」

私は立ち止った。いいかげん、埒があかないんだもの。

自転車を押していた浩輔も立ち止まって、不思議そうに私を振り返る。

私は慥然として言った。

「私が。あなたに。泣いて助けを求めているように見えますか？」

「・・・見えません」

「となると？」

「・・・ドツペンゲルガー説を採用致します」

浩輔はすっかりしょぼくれて小さくなり、これまた上目遣いに片手を顔の横に上げて、まるで宣誓するような仕草で答えた。

私は大袈裟な溜息をついてみせた。

「じゃあ、私、気をつけてソレを見ないようにしなくちゃ」

「え？何で？」

「だってドツペンゲルガーって、本人が見たら死ぬらしいじゃない」

「え？そうなの？」

「昔、読んだ事がある」

「まずいじゃねえか」

しよぼくれ一変、真顔で眉根を寄せて私を見ると、真剣な面持ちで彼は言った。

「信濃町に行くなよ。」

ちよつとそれ、本気？っていうか、どこまで本気？まさか最初から本気？純粹にも程があるでしょ？

と、本気で諭すのもばかしくなつて、私はあえて話を合わせてみた。

「何それ。そんなの無理。っていうか、相手も動くから」

「え？移動するの？」

「するでしょ。地縛霊とは違うんだから」

「・・・そっかあ」

するとね。今度はね。感心するんだよね、君は。

「あさみって、さすがにホラー好きだなあ。普通に言えるんだ、そっ言っ事」

その柔らかな頬がますます子供っぽく見えて、どう言っ事だろうね。何に感心してるんだろうね。そしてさっきのアレはどこまで信じているんだろうね？

「だって信じてないもん。現実味ゼロだから」

「ええ？じゃあ、俺の頭がおかしいって思っているの？」

「それか、私に死ぬほど惚れているか、って思っている」

こっちは話をテキストに進めている延長で言った台詞なのに、そりゃ、少しは、ううんかなり、願望は入っているけどさ、でも。

「・・・え？なんでそこで赤くなるの？」

「あ、いや、ごめん」

「・・・そしてなんで謝るの？」

「・・・あ、いや・・・」

赤くなった浩輔につられて私も赤くなって。リトマス紙みたいな二人。そして沈黙。

立ち止まってる私達。

辺りはもう、暗くなってきた。

友達歴10年以上にして初めて訪れるこの雰囲気。

多分、自分が望んでいた事だろうに、いざとなると怖くて勇気が出ない、この中に居たくない。

「もう、サークルに行く気が失せたなあ。ドッペンゲルガーにも会いたくないし。私、家に帰ろうかなあ」

私は少しわざとらしく伸びをしながら言うと、浩輔は慌てた様にそれに乗っかってきた。

「そうしなよ。今日は、ごめん」

その言葉に、何故か力チン、とくる。自分が言いだした台詞のくせして、同意されて腹を立てていれば世話はない。つい俯いて、ふてくされた様な言い方になってしまった。

「・・・別に、謝らなくてもいいよ・・・。心配してくれたのは確かだし・・・」

再びの、沈黙。妙な感じになっちゃった。

顔を少し上げてみると、浩輔は、言い訳も許されない立たされんぼの小学生、の様に立っている。眉毛を下げて。

・・・可愛いけど、あれみたい。ほら、反省しているお猿さん。というよりモンチッチ。

ああ、なんだか私が苛めている様な気分になってきた。いっつもそう。最後はこうなる。で、私が折れるんだ。

「・・・あと一人ぐらいに、電話してみようか。念のため。」  
意味も無く空を見上げ、意味も無くいつもの様に溜息をついてしまった。今日も負けたわ。

「え？」

「だって浩輔の不安をそんなに煽る状況だったのなら・・・もし本当なら、大変な事になっているかもしれないものね？」

浩輔は嬉しいのか心配なのか複雑な表情をしながら、私の顔色を伺う様子を見せる。

私は少し拗ねた口調で言った。

「浩輔が私と間違えるとしたら・・・あと、誰？」  
「え・・・誰だろう・・・？」

当惑した様に考え出した。私がヒントを出す。

「下の名前を呼ぶ女の子で」  
「えっと・・・あ。みのり」  
「みのり？」

「うん。あの子、俺の名前を浩輔って呼ぶ」  
「・・・理由、それだけ？」  
「うん。他に思いつかない」

簡単だなー。あっさりしているなー。こだわらないなー。  
・・・ああ違う、こだわっていた。あれは私だ、ってこだわっていたんだ、この子は。

みのりは、私達テニスサークルの同期の女の子。少し大人しめの、穏やかで可愛い癒し系の子。

「そうかあ。じゃあ、念のためみのりにかけてみまーす」

私は明るくそう言っつて、携帯を取り出した。

これで彼の気持ちも落ち着き、私達二人のこの妙な空気も収まるなら、電話をあと一本かけるなんてお安いものです。

ところが。これが思惑を大きく外れた。

「・・・繋がらない・・・」

「・・・全然ダメ？」

「うーん・・・」

困ってしまった。自分でサイを投げといてそれを回収できないとなると、なんとも中途半端な気持ちになってしまう。こんな事なら、電話をかけなきゃよかったかも。  
でも、動き出しちゃったし・・・。

「みのりんち、こっから割と近いんだよね」

「あ、そうなんだ？」

「うん。二駅先」

「……………」

二人して再び無言で、でも今度は見つめ合ってしまった。無言の確認。

「……………行く？」

「……………行く？」

「……………ここまで来たら？」

「……………最後まで？」

言葉の確認。あーあ、決定だ。

内心、ホントめんどくさいな、って思ったんだけど、まあこれでもう少し浩輔の自転車に乗れるし。

「え？自転車で行けるの？俺、道分かんないよ？」と驚く彼をなだめて、いつもの特等席に腰を降ろした。トレーニングだと思えば、ね？

「みのりー」

「みのりー……………いないみたい」

自転車で15分。みのりの部屋に着いたけど誰もいなかった。アパートの一階。

「どっか出かけているのかなあ」

「・・・家に居ないもんね？出かけているってことだよな？」

「あ、そっかあ」

「・・・・・・・・」

何も考えていない様に返事をする浩輔を、ジッと見てしまう。

そりゃね、携帯が繋がらなかったからって家に来たってどうしようもない事ぐらい知ってたけど、一応形だけでも彼を納得させようと思っただけなのに。それなのに。

「その呑気さ、みのりだって思っていないでしょ？」

「え？・・・うーん、正直・・・」

あっさりと答える彼を見て、私は思いつきりガツクリと来た。これは名実共に、ムダ足、ってヤツですね？？

「あーあ、なんか力が抜けてきちゃった。そして眠くなってきた」

「ええ？ また？ さっきまで寝ていたのにな？？」

「だからかなあ？浩輔の眠そつな顔を見たら余計に・・・」

「俺、眠くねえよ、今は」

違うよ。遠まわしに嫌味を言ってるのよ。真剣味が足りないって、何も考えてなさすぎて言いたいのだ。

なのにこの子は、私を正面から見て、物凄く真面目に言った。

「あさみ、ひよっとして生理、近い？」

「えええ???？」

私はビツクリ仰天、文字通り飛び上がってしまった。何、その、暴力的な話題転換はっ!!!???

「何それっ?!」

「あ、ごめん。違ってた？」

「謝る場所が違うっ!!!何で私の生理周期を知ってるのよっ?」

「だってあさみ、生理前はやたらと眠くなるじゃん」

「だから何でそれが生理前だって知ってるーっ?!」

「しっ。ちよつと黙って」

「はあっ???!」

「何か聞こえる」

浩輔は人差し指を私の唇の前に立てて口を閉じさせ、真剣な表情でドアに軽く耳をあてた。

結果、私が一人でバカみたいに騒いでいたような音が出来上がってしまっ。ちよつとおお!

人の生理を話題に出したのはそっちでしょ?!

ところがあまりにも彼が真剣なので、私も自然と大人しくなり、彼の隣で同じようにドアに耳をあてた。

確かに、ドンドン、部屋を揺らすような重低音が聞こえてくる。うん、実際、揺れている。

「・・・何？」

不安になってきて、ドアに耳をあてたまま浩輔に聞いた。  
彼も体勢そのまま、眉根を寄せて私に返事をする。

「物音？」

「何かが・・・ぶつかる音？」

「人の声も聞こえない？」

「みのり？」

「わかんない。・・・取り込み中？それとも・・・」

彼がドアをノックした。

その瞬間、何かがドアに投げつけられた。固い物が激しくぶつかり  
落ちる音。

突然の耳障りな大きい音に、私達二人は飛び下がった。

「うわっ」

それとほぼ同時に、中から聞こえる叫び声。女の人の声。

私は、身の毛がよだった。顔から血の気が引いて、立ちすくんでし  
まった。

どういふ事？?!..!

「・・・ヤバイよね？」

喉から絞り出すように声を出して隣の浩輔を見ると、彼は今まで見た事も無いくらい険しい顔をしてドアを睨みつけていた。そしてそこから視線を外さず、とても低い声で私に言った。

「あさみ、隣近所を片っ端からノックして大家の連絡先を手に入れる」

「何するの、浩輔？」

直後、何と浩輔は体を横向きにして、ドアを激しく蹴り始めたのだ。私は飛び上がってしまった。

「なっ・・・！ドア壊れるよっ！！」

「脅してんだよっ！！」

そう言って男の足で渾身の力を込めて、ドアを横蹴りする。金属製の扉は、蹴られたくらいじゃ壊れそうには見えなかったけど。

「な・・・もし何でも無かったらっ・・・！！」

「謝って弁償だっ！！みのりっ！！みのりっ！！」

「え、ちよっと・・・。」

暗くなり始めた中、浩輔が遠慮なく大声を出して激しくドアを蹴り続ける。二つの騒音が重なって尋常でない雰囲気を作り上げていた。私は狼狽した。浩輔はそんな私の様子を意に介さない。こんなに思いつきりのいい人だったとは。

「みのりっ！・・・ドアが壊れるか、先にドアが開くか、あさみが大家に連絡するか・・・あ」

中から、ドアが開いた。

みのりだった。

意外にも、普通の恰好をしていた。  
一人だった。

浩輔が落ち着いて聞いた。

「みのり、大丈夫？」

「・・・浩輔・・・？・・・あさみ・・・」

みのりは驚いた様に私達二人を交互に見た。

「何があったの？ノックしても出ないし、中から大きな物音が・・・え？」

私は部屋の中を見て絶句した。  
部屋が、メチャクチャになっている。  
雑貨が散らばり、食器が割れ、本がばらまかれ、まるで暴動にあっ  
たお店屋さんの様。

「入るぞ」

浩輔は無言を言わず中に入った。土足で。

・・・だって、こんなに色々なものが割れていちゃ、靴を脱げない。

「・・・何が起きたの・・・？」

部屋に入った私は、みのりを振り返って聞いた。

彼女は俯いて、小さく答えた。

「・・・何でも・・・」

「何でもって・・・これは、何でも無く、ないよ？」

「・・・」

「みのり・・・手も・・・」

みると彼女の手は所々切れて、血が滲んでいた。ひよっとして、この部屋にある割れ物を投げつけた時にできた傷かもしれない。

「どっしたの、この怪我？」

「……怪我、しちゃったの……」

「何で？」

何で、物を投げたの？

「……うつかり……」

「うつかり？」

それつきり黙りこむ彼女。

私は深呼吸をすると、彼女の両肩にそつと手を置き下から顔を覗きこみ、出来るだけ優しく穏やかに言った。

「話してよ。力になれる事なら協力するから」

「……無理だよ……」

絞り出すような彼女の声は、今にも消え入りそう。うつん、彼女自身は今、この場から消え入りたいたんだ。

「協力なんて、出来ないよ……」

口から漏れ出す声は彼女の心が漏れ出す様で、言葉は私達に伝える為にある訳ではないらしい。

「誰も助けらんないよ・・・」

私達に伝える為で無い言葉は、かといって自分に言い聞かす為でも無さそうで、多分、自分が喋っている事にも気付いていないようだった。

それくらい、彼女の心は段々と私達から離れていく。それが手に取る様にわかって、私は少し寒気がした。

「・・・私、妊娠しているの」

なんの脈絡もない、突然の告白。

その時、この世から音が全て消え去ったのかと思った。

あまりの台詞に。

「・・・え？」

耳を疑った。

言葉が、出ない。

状況が理解出来ない。

目の前のみのりは、目がうつろなのに髪も服もたいして乱れていなくて、むしろいつも通り小きれいで、  
なのに部屋の中はまるで異空間の様に惨憺さんたんたる状況で、

そのアンバランスさが、一種異様な雰囲気醸し出して、みのりの言った事は本当なんだ、と思い知らされた。

それでも、信じられない。

穏やかで、優しく可愛くて、どちらかというと地味なみのりが。

妊娠なんて。

そして我を失って錯乱しているなんて。

「妊娠してるって……」

私はゆっくり言葉を噛み締めた。何も映していないみのりの瞳を覗き込みながら、腕が震えない様に気をつけて言った。

「……相手は……誰……?」

「……」

「……みのり？」

「……大樹……」

「大樹??!!!!」

大声を出してしまった。止められなかった。あり得ない！大樹！！

大樹は、私と浩輔のもう一人の幼馴染。小学校から高校まで一緒だった。

大学は違う所だけど、今でも時々私達と遊ぶ。

みのりと大樹は、私達……私と浩輔を通じて知り合ったハズだった。

そんなに特別、仲が良いとは気付かなかったのに。

そして大樹には、中学時代から今まで続いている彼女がいる。彼女も私の友人だ。すごく仲がいい。

「え？大樹って……どう言う事？」

情けない事に私は狼狽してしまい、みのりの肩から手を離してしまっ

た。代わりに浩輔が彼女にそつと近づき、低い声で、静かに聞いた。

「付き合って……いたの？」

「……うつん……」

やっとみのりの目に少しの色が戻ってきた。目の前に私達がいて、

自分が会話をしている事に気づいたかの様に。

ゆっくりと、私達の顔を見る。

表情を変えず、ふっと視線を空中に泳がせて、言葉も空中に泳がす様に呟いた。

「・・・一回きり、だったの・・・」

再び心ここにあらず、の目つきをする。

私は、紙に水がしみ込んでいくように、徐々に、徐々に、状況を理解していった。

つまり大樹は、浮気として、私の友人に手を出した。そして妊娠をさせた。

みのりは、妊娠をしてしまった。私が紹介した男のせいだ。浮気相手として。

「・・・そんな・・・」

目の前が、真っ白になった。

間抜けな事に、何故だか子供の頃の大樹の姿を思い出した。彼は小学生の時からガキ大将だった。

私は結構彼とは気があって、二人でよくのんびり屋の浩輔をからかったりした。

あの時は、みんなひたすら無邪気だったのに。

「……大樹には、言ったの？」

言葉を失った私の代わりに口を開いたのは浩輔だった。静かな声でそっとみのりに問いかける。

「……言っていない……」

「じゃ、言わなきゃ」

「言ってどうなるの?!」

急にみのりが私達に向き直った。

今まで見せた事の無い、怒りと絶望の激しい表情で、体を折り曲げて怒鳴り出した。

「彼女と別れて下さいって言うの？私と結婚して下さいって言うの？私達まだ大学生だよ？大樹だって就職が決まったばかりだったのに、内定取り消されちゃうよっ。私だって急に母親なんてなれないよっ」

唇が震え、顔が歪み、涙が頬をつたってポタポタと垂れ落ちる。それを拭うことなく彼女は叫び続けた。

「産んでくれって言われたらどうするのっ？私とは結婚出来ないっ  
て言われたらどうするの？墮ろしてくれって言われたらどうするの  
っ？私、そんな事出来ないっ……！」

言いたい事を一息に言いきって、初めて息継ぎをする。  
その時、今まで出さきった感情も言葉も、涙さえも逆に呑み込んで  
しまったかの様だった。

急に喉を詰まらせ、何も言わなくなった。  
そして彼女の目の前で固まったまま動けない私達から目を反らし、  
やがて両手で顔を覆った。

「……そんな事、出来ない……」

そのまま、声も出さずに動かない。  
みのりは号泣していた。声も涙も出さずに泣いていた。

産む事なんて出来ない。墮ろす事なんて出来ない。彼と結婚なんて  
出来ない。彼女はそう言っている。

「……じゃあ、みのりはどうしたいの……？」

しん、とした部屋で、私の掠れた声が響いた。

「……わかんない……」

みのりの声は、私よりももっと掠れていた。

私は泣きたくなる気持ちで彼女に言った。

「……だから、大樹に話すんじゃない？」

「……でも、大樹は、私の事、愛しては無い……。大樹には彼女がいる」

「それでも、みのりと大樹の子なんですよ……。じゃあ大樹に話すしかないじゃない」

何で私、こんな事しか言えないんだろう？

もう、頭の中がぐちゃぐちゃで、涙が出てくる。

「私……私が大樹の人生の……邪魔に……なりたくなかった……のに……」

そう呟いた彼女は前を見つめたまま、再び涙を一筋流した。

それを見た浩輔が、やがて口を開いた。

「みのりは・・・大樹の事が好きなんだ・・・?」

みのりは少し眼を見開いて浩輔を見て、その後自嘲気味に笑った。

「・・・ずっと・・・好きだった・・・」

自嘲。自らを、嘲笑う。本当に彼女は、自分を嘲笑っていた。

「酔った勢いでもいいと思った。一回きりでもいいと思ったの。ずっと好きだったの。私が・・・私が、あの時、最後まで大樹についていったようなものだったから・・・」

知らなかった。気付かなかった。みのりの切ない恋心に気付いてあげていなかった。もし私が気付いていれば、ひよつとして、違った結果になっていたかもしれないのに。

ううん、そもそもみのりに大樹を紹介していなければ。

「・・・じゃあ、おめでと。」

浩輔が柔らかく、ぼつりと言った。

私とみのりは顔を上げた。

「え？」

すると彼は切なさうに、でも優しく笑った。

「好きな人の子なんですよ？じゃあ、まずは、おめでと。」

静かに、優しく、囁く様にみのりに言う。

みのりはすごく複雑な表情をした。怒っていいのか、受け入れていいのか。

悲しんでいるけど、本当はおめでたい事なのかも、と初めて気付いた様に。

「……でも、私、まだ産むかどうかは……。」

「うん。でも、みのりの思いが叶った事に、おめでと。だろ？」

「……。」

思いが叶ったとは、好きな人と一緒になれた事。

みのりは穏やかで真面目な子だから、大樹の事も本気で好きだったのだろう。

彼女がいる事も分かっていて、それでも止められない恋心にきつと本気で悩んでいたんだろう。

だから、私に相談も出来なかったんだ。だって私と大樹の彼女が仲がいい事は知っていたから。

浩輔はすごく切なさうな表情をして、でもそれは大人の男の表情だ

った。

時々私の前で見せる、潤んだ瞳で拗ねたように唇を尖らす様子とは全然違う。

まったく、違う。

「俺、産んでも産まなくても、みのりは苦しむ事、わかってる。だつたらせめて、今は、おめでとうって言いたいな。・・・ごめん」  
「・・・・・・・・。」

浩輔はみのりの頭に手を伸ばし、そつと髪を撫でた。

低い声で、優しく、でも少し苦しそうに、真剣な眼差しでみのりを見つめる。

「大樹に言えよ。よければ、俺達がいてやるよ。・・・男任せにしていたみのりも悪いけど、そもそもゴムを付けなかったあいつが悪いんだろ？責任、取らせるよ。・・・な」

「・・・・・・・・うん・・・」

浩輔も、自分の親友が自分の友人を傷つけた事に苦しんでいる。

あまりの事に、動揺している。

きっと大樹を見つけて詰り倒したいに違いない。

でも何をしたらどうしようもない事もわかってるから。

だから最初に「おめでとう」っていうなんて。

なんてあなたらしいのかしら。

「ありがとう。あさみ。浩輔。・・・でも今日はもう、帰って」

みのりが言った。少し微笑みを見せてくれたけど、でもやっぱり瞳には何の色も出ていなかった。

私はどうしていいのか分からず、ただオタオタと彼女の名前を呼ぶだけ。

「・・・みのり・・・」

「・・・大丈夫だから・・・」

「でも」

「お願い」

俯き、私達と目も合わせず、でもきっぱりと言った。

私は息が詰まる思いがした。どんな力にもなれない自分が、本当に情けなかった。

ここは本人に拒まれても、一緒に居てあげるべきじゃないかしら？

でも、みのりの全身が、それを否定している。

「・・・バカな事、しない？」

「・・・もう、した」

「約束してくれないと、帰らない」

「じゃあ、約束する」

「守れる？」

「・・・うん」

バカな事ってなんだろう、って考える。自分で言っというて、バカな事って何だろう？

みのり。みのり。私達、あなたのそばにいるからね？

神様どうか、この子を支えて下さい。お願いします。この子は稀に見る、いい子なんです。

私は湧きあがる様々な思いを押さえつけて、無理やり少し微笑んだ。

「じゃあ、後片付けしたら帰るよ。片付けてあげる」

「え、いいよ」

「これ拒否したらもう帰らない」

「・・・」

みのりは再び黙ってしまった。

私は勝手にゴミ袋を取り出して来て、床に散らばっているものを拾い始めた。浩輔もそれにならった。

みのりは何も言わない。動かない。

ただ、立ちつくしている。

私は壊れたものは全て、ゴミ袋に突っ込んだ。本は棚にしまった。割れてない雑貨は、いつもの様に綺麗に飾って上げた。

せめて、片付いている部屋に居れば。彼女の気持ちが少しでも、落ち着いてくれるかもしれない。

「みのり」

全てを片付け終わった時、私はみのりを振り返った。みのりは少し落ち着いた様子で、私達を眺めていた。

「みのりの人生だよ。みのりがコントロールするんだよ？みのりが決めていいんだよ？みのりが主役なんだよ」

何をどう言っているのかわからない。ただ、自暴自棄にだけは、なつてほしくなかった。

「・・・監督も、みのりなんだからね」

上手く言えない。上手く伝わらない。どうしても動揺を隠せない私を見つめていたみのりは、急にクスツと笑った。

「・・・ふふ。あさみらしい」

その笑顔はほんの一瞬だけど、いつもの可愛いみのりの笑顔だった。

「ありがとう。後で、連絡するね」

柔らかい口調で微笑むのだけれど、有無を言わせぬ目をしている。私達は彼女の部屋を出て行くしかなかった。

みのりの部屋を出てから、私と浩輔の間に会話は無かった。というよりも私は激しく動揺してしまい、ただ彼の後をボーっとついて歩くだけで、自分がどこに向かっているのかの自覚も無かった。ふと気がつくと、駅前に来ていた。私の家の最寄りの駅の隣駅。みのりの部屋からは少し離れた駅。あれ？いつの間になんかに歩いていたらだろうか？

浩輔が駅前の商店街の一角、自転車置き場に自転車を止める。鍵をかける。

そこで再び気付いた。あれ？そう言えば私達って、直でみのりんちに来たんじゃなかったっけ？自転車で。

「ここに置くの？自転車。」

私が尋ねると、浩輔は自分の自転車を見下ろしたまま、小さく呟いた。

「うん・・・なんか・・・」

しばらくして、顔を上げる。私を見た。丸っこい目。

「あさみ、歩けるか？」

「え？」

「歩いて帰らうぜ」

駅前に自転車を止めて？でも電車に乗らずに？歩いて帰るの？

でもその時の私には、何故だかそれが、とても自然な事に思えた。  
歩いて帰る。浩輔と二人で。自転車にも乗らず、電車にも乗らず。  
わずか一駅の距離。

「……うん……」

知らずに苦笑と溜息が洩れた。  
私達はゆっくりと歩き出した。

「……どうするんだろ、みのり……」

彼の背中に問いかける。華奢な背中。  
でも、男らしい背中。

「……さあな」

彼は少し空を見上げながら言った。もうすっかり、日が暮れている。  
でもここからは星が見えない。  
建物が多すぎて、周りが明るすぎて、空気が悪すぎて。

まるで、今の私達の様だった。  
自分達が見たい、目指すべき光が見えない。周りの障害が多すぎて、  
周囲がうるさ過ぎて、……空気が悪すぎて。

星が、見えない。

「……助けて、あげられないのかな……？」

ゆっくりと俯いて、目の前を歩く浩輔の足元を見つめながら、私は小さく呟いた。

浩輔はしばらく無言で歩き続けた後、静かに言った。

「……友達で、いつづけるしかないよ。……でも、多分、それでいいんだよ」

それでいいんだよ。

彼にそう言われると、私はいつも、安心する。そっか、それでいいんだ、って。

事実今も、すこしホツとしかかっている。

そうなのかな？それでいいのかな？力になれているのかな？……だといいいんだけど。

「ほ」

急に浩輔が振り返った。

立ち止まって、私に左手を差し出している。



軽く頭を小突く様に一撫ですると、すっと私の右手を取り、そしてそのまま無言で歩きだした。まるでそれが、当り前の事のように。

手を引かれる私も、まるで当り前の様に歩ける。それくらい私達の歩調は重なっている。歩くりズムが、全く同じ。あまりにも自然で心地よいので、ビックリした。

繋がれた手は、彼の手からの甘さを感じてしまい、まるでそこだけ切り取られたパラダイスの様でもう二度と離したくない。

「俺達、何に遠慮していたのかな？」

前を向いたまま、浩輔は静かに呟いた。

「人の気持ちですら、先の事ってわかんないんだな。・・・誰かと気持ちが重なるだけでも、それって、多分・・・奇跡、なんだよな」  
私と手を繋いで歩きながら、前を向いて、浩輔は穏やかに言った。

「それでも、先の事はわからない」

彼に手を引かれてその心地よさに揺れながら、でも私はその言葉を噛み締める事が出来ていた。

そう。先の事って、どんな事でも、結局わからない。  
まさか可憐やみのりがこんな事になるなんて。昨日までは想像もしていなかった。

77

全然、わからないね・・・。

浩輔が、ふいにこちらを向いた。

「俺さ、もう、あさみに何十回も惚れてる」

「・・・え？」

突然の台詞を理解するのに時間がかかり、一瞬の間をおいて、私は驚いて彼の顔を見た。

彼は穏やかに私を見ているのだけれど、目が含み笑いをしていた。

「ずっと前から。知らなかったの？」

「……浩輔……」

一気に動機が激しくなる。顔が赤くなるのが自分でもわかった。彼は綺麗な瞳でそれを面白そうに眺めた後、言葉を続けた。

「それで、今」

そう言って、急に立ち止まる。  
つられて私も止まった。

「あさみ、俺に惚れてる最中でしょう？」

「えっ……」

これまた理解をするのに若干の時間を要し、再び真っ赤になってしまった。

そんな様子を浩輔は間近で、唇をキュッと結んで真剣に見ているのだけれど、

目が、目が思いつきり笑っている。

というか、目が笑いたいのを堪えている。

「……なんという事を……」

私はうろたえて狼狽し後ずさったんだけど、そういえば彼と手を繋いでいたものだから2歩も離れる事が出来なかった。

「うふふ。やっぱり？」

ついに彼の口角が上がる。嬉しそうに、ちょっぴり得意そうに、ふわっと笑った。

「ずっと見てきたもんなあ。わかるだろ」

そう言つと繋いでいる手をグツと引き寄せる。抵抗する間もなくそのまま引き寄せられたら、

ちゅっ。

と軽く唇にキスをされた。

一瞬の出来事であまりに急で、まさしく度肝を抜かれてしまった。絶対私今、「皿の様な目」をしているわ。

そんな私を見て、満足そうなあなた。

「先の事なんてわからないのにさ」

そう言つて彼は少し悪戯っぽく微笑んだ。

「今を怖がっていたら、もったいないよね？」

「浩輔……？」

「でも俺、あさみとなら、どんな方向に転んでも受け入れられる気がする」

その時の彼の表情は、いつもの下がり眉で困った様に私を見る、潤んだ瞳とは全然違っていた。

真っ直ぐで強い視線。私を捕らえて離さない、力強い何かがある。

「男」を感じさせて、ドキッとした。

「俺、今日一日色々あって、色々考えた。今を大切にしたい。遠慮するの、やめた」

そして至近距離から私をジッと見つめてきた。

強い光の中に慈しむような色を滲ませて私を見るその瞳は、14年間一緒に居て、時々私に見せてくれていたもの。

そして、私が手に入れたかったもの。

「……今日の浩輔、いつぱい喋るね？」

ドキドキしながら、彼から視線を外せず、口調だけでも少し茶化して見せた。

彼も私から視線を反らさず、口の端を少し上げてニヤッと笑い応える。

「そう思う？ 俺も。なんか一生分喋りつくした感じ」

「・・・それじゃ、教壇に立てないよ？」

「だなー」

一瞬脇を向き肩をすくめてクスツと笑うので少しホツとしたら、次の瞬間、息を飲む様な煌めく瞳で、私を捕らえた。

「でも、足りない」

熱い光が私を射抜く。身動きが、取れない。

「言葉が、足りないよ。それぐらい・・・」

呼吸が、止まった。彼から視線が反らせない。台詞の先を待ってしまふ。それぐらい、何？

鼻先が触れるくらいの距離まで、彼が近づいてきた。私の瞳を覗きこんで、囁く様に言う。

「・・・抱きしめて、いい？」

「・・・嫌って言ったら？」

「・・・言わないよ」

クスリと笑ったその瞬間、ふわっと彼の腕に包まれた。そしてその空間がゆっくりと、徐々に、狭まっていく。彼の香りに包まれていく。

それがドキドキするのに物凄く心地よくて、しかも馴染みのある落ち着いた空間である事に気がついた。

すぐくしっくりくる。私の居場所って、ここだったんだー・・・。

なんて幸せなんだろ。

ここは自宅から少し離れた、でも見知った公園前。住宅地の夜なので、人はいない。

浩輔、計算してココで仕掛けたのかなー？だとしたら、やっぱり男の子だなー。

なんて呑気な事を考えながら心地の良い彼の腕の中に収まって、彼の肩に額を押し付け、彼の服の裾をギュッと掴んだ。

なんかね、抱き返すよりももっと、甘えたい気分になって、ね。

どうしよう。大好きすぎて、切なくなってきた。

抱きしめられているのに、なんでだろう。

私は彼の腕の中で呟いた。

「・・・みのり、どうするのかな？」

「・・・わかんない。・・・でもとりあえず、俺・・・」

浩輔は私の背中にまわしていた手を頭に移動させ、少し強めにグッと抱きしめてきた。

「大樹、ぶん殴りたい」

「・・・そだね。私も」

大樹は私達二人の親友。それだけに、言いたい事も聞きたい事もいっぱいある。

二人で、しばらく無言になった。

でも無言が全然苦痛でもない。

私は自然に顔を上げて、触れそうなくらいの近くにいる浩輔を見た。彼は目を細めて私を見つめた。

甘やかに、笑う。

「ここで、顔、あげるんだ？」

声も、すごく甘い。

私はドキドキしながらも、かなりくすぐったくなってしまうた。やつぱりさ、ちよつと笑っちゃうよ。

「・・・なんか照れるね」

「そう？」

「・・・私達が、今更って感じがして・・・」

ね？ね？だよな？笑っちゃうよね？可笑しいよね？

「じゃあ」

急に、彼の瞳が甘いだけではなくなった。

挑戦的な、それでいて艶っぽい色を見せる。

一気に笑いが引っ込んだ。それどころか、息まで呑み込んでしまった。

心臓が大きく飛び跳ね、再び身動きが取れなくなった。

浩輔は、低い声で、誘う様に囁いた。

「あさみの好きなやり方で、キスして」

「え？」

「ね？ほら」

妖しく揺れる唇が、私の唇を掠めながら囁く。彼の香りが私を惑わす。

私は頭の芯が痺れてきた。

そして誘われるまま、そっと、自分から、彼に唇を重ねた。

しっとり、くちづけ。

彼はされるがままにしている。

私は自分で仕掛けながら、あまりの甘さに頭がクラクラしてきた。

しばらくして、始めた時と同じように、私はそっと唇を離した。  
掠れる声で尋ねる。

「……ど、だった？」

「サイコー」

あなたの笑顔も、今までの爽やかで可愛らしくて男らしい笑顔に加えて、今まで見た事のない色っぽさと自信が瞳にあって、

やっぱり最高。

その瞳が、今度は妖しく煌めいた。

「でもやっぱり、全然足んねえ」

次の瞬間、彼から口づけをされた。

それは私がしたものとは全然違い、もっと欲に満ちていて、激しくて、熱くて、とろけて、目眩がするものだった。

馴染みのある落ち着く彼の腕の中が、一気に見知らぬ、動悸を激しくさせる、痺れる空間へと変わる。

口内を激しく優しく、時にはなぞる様に絡める様に掻き回される。

私は立っていられなくなつて、腰が砕けそうになった。

浩輔がこんなキスをしてくるなんて……。

飽きる事の無い、キス。

お互いがこんなに欲望を抱えていたなんて、知らなかった。

「どうしよう。俺、なんかスッゲー焦ってる」

やっと唇が離れた時、彼の声は少しかすれていた。

「ずっと一緒に居たあさみなのに、なんか俺、今日一日焦ってたよな。」

間近から私を覗きこむ彼の瞳が、どこか切なく潤んでいる。

「多分、駅であんなの見ちゃったから」

そんな彼の表情を見ていたら、私まですごく切なくなってきた。

多分それは、あなたの愛情が私の胸に突き刺さっているからだよね。だって何でか胸が痛い。

「浩輔……」

「今となっちゃ、あれがあさみじゃなくて良かったよ」

私の額に自分のおでこをくっつけ、肩をすくめて苦笑する。私もつられて、少し笑った。

「……誰だか、気になる所だけどね」

「……うん」

一瞬、考える様に彼は視線を地面に移した。  
男の子にしては長めの睫毛が、綺麗な影を落とす。  
そして次には、いつもの素直な、人を安心させる様な柔らかで優しい笑顔を見せた。

「でも俺、あさみがいれればいいや」

「ずっといたじゃん」

「・・・だな」

またどこか切ない顔を見せるあなた。どうしたの？なにか不安なの？こっちまで不安になるよ。

私をしばらく見つめた後、彼は私の頭を抱き寄せた。その上からギュッと自分の頬を寄せてくる。  
私を抱きしめる腕がきつくなる。

それが彼特有の甘え方の様に感じて、私はじっとしていた。  
やがてゆっくりと彼の背中に腕をまわして、同じようにギュッと抱きしめてあげた。あ、やっぱり華奢だ。

彼の囁きと溜息が上から降ってきた。

「今日はマズイよな。送って行くよ」

浩輔の心は、一体何に揺れているんだろう？どうしてそんなに切なそうなんだろう。

今日一日色々な女の子を慰めて励ました彼だけど、心の中はやっぱり傷ついていたのだろうか？

そんなにヤワな神経をしているとは思えないんだけど。

「・・・あ、うん」

「何？帰りたくない？」

「・・・あ、うん」

「え？」

「え？」

考えながら返事をしていたものだから、ちょっとおかしな事になったらしい。

浩輔は腕を緩めて、目を丸くして私を覗きこんだ。

え？帰りたくない？あ、言っちゃった？そうじゃなくって、え、そ  
うでもいいんだけどね、あ、ダメ、私なんの準備もしていないって  
そうでもなくってってそうじゃなくって。

「あ、今日はマズイね、うん。確かに。色々とね。なんかね。・・・  
お母さんにもバレてるし」

な、何を言っているのだろう。誘っているの、私？

浩輔はそんな私を少しビツクリした様に眺め、次にクスツと笑った。

「明日ね」

そう言って可愛い顔を少し傾けるあなた。

「バイト終わったら、デートしようぜ」

「・・・デート・・・」

「そ。飯食って、どっか遊びに行こう。あ、俺、上野の博物館行きたい。今見たいのやってんだ」

「・・・その後、秋葉原？」

「おう、そうだそうだ。いいね」

「それって、今までのと変わらないじゃん」

私が時々、付き合わされてきたものと。

少し上目遣いで彼を睨んで見せると、彼はさも愉快そうに肩を震わせて俯き、声も無く笑った。

「・・・ごめん。あさみが行きたいところ、どこでも連れてく。どこがいい？」

って笑い過ぎて君の瞳、弱冠涙目だし。

だから私は、あなたが期待している答えを返してあげるの。

「・・・じゃあ、明日はアキバの代わりに池袋あたりで、お洋服買うのを付き合ってもらおうかなあ」

「それもいつもと同じだー」

「ホントだー」

そして二人で、笑いあった。おでこをくっつけあって、いつまでも笑いが止まらない。

私達ってホント今まで、何をやっていたんだろうね？  
私達ってこれからも、多分こんな感じなんだろうね？

「違うよ」

まるで私の声が聞こえたかの様に、急に浩輔が言った。

見事なタイミングに驚いて彼を見たら、その瞳は再び甘ったるい色  
つばさで私を見つめていた。

「手、ずっと繋ぐし、キスもするだろ？」

それだけで胸が高鳴る。体が熱くなる。

彼がそっと私を抱きしめる。

すごい。あなたの腕の中って最高に落ち着ける場所で、最高に痺れ  
てとろける空間だ。

彼は私に、再びキスを落としてきた。

優しく口づけ、軽く舐めあげながら、何度も何度も私の唇をついば  
む。

その度に、囁きかける。

「明日、な。電話すつから」

「うん」

「絶対だぞ？」

「うん」

「絶対だかな？」

「うん」

「・・・好きだよ」

「・・・私も」

確認するように、何度も落とされるキス。

彼は結構な甘えん坊なんだなあ、と思った。普段はのんびり屋で割とボーっとしている所があるから、どちらかと言うと恋愛には淡泊な方かと思っていた。

でも今の彼はまるで心の不安を解消したいかのように、何度も私を確認してくる。

それが愛しくもあり、私をやっぱり切なくもさせた。

浩輔は家の前まで私を送ってくれと、流石に門の前じゃ恥ずかしくなったのか（だって私達の生活空間、みたいなものだものね。照れるよね）片手を上げて軽く手を振り、ポツケに手を突っ込み帰って行った。

見慣れた、けどいつもと違う思いを込めて、彼の背中を見送る。

また明日、ね。

華奢な背中。

でも男らしい背中。

すぐく頼もしい背中である事を、私は知っている。

知っていた。

そしてそれが、浩輔と話した最後となった。

私はぼんやりと街を歩いていった。

手には、先ほどお花屋さんで買った程良い量の花束がある。

浩輔の好きな花なんて、知らない。だから私の好きな花にした。

薄い黄色の柔らかな花びらが何重にも、おしべとめしべを愛おしそ  
うに包んでいる、花。

浩輔のお葬式は、大勢の友人が集まった。

こんなに沢山の友達がいたんだ、こんなに多くの人に愛されていた  
んだ、と私は心の片隅で呑気に感心していた。

いつもおとなしくてニコニコ笑っている彼だったけど、その人柄は  
誰もが求めたくなるものだった。

彼の側にいると癒される、と皆が言った。

彼の柔らかな雰囲気、とぼけた表情が好きだった、と皆が言った。

号泣して泣き崩れる女の子を見た。その様子を見て自然に考える。  
多分、彼の歴史のどこかで付き合っていた子なのだろう。

人目も憚らず泣いている彼女とそれを支える女友達。あの子とその  
友達は体全体で、浩輔のお葬式で泣く権利を主張していた。私達に  
はその資格が充分にある、と。

私はその光景をボーッと眺めた。  
全部知っているようで、やっぱり私は彼の一部しか知らなかったら  
しい。

あの情熱的なキスも熱い腕の中の温もりも、あの子は知っているの  
だろうか？

なんで、なんで、なんで。

なんで、彼が。

なんで浩輔が。

どうして私の幼馴染が。

どうして、私の好きな人が。

次の日デートの約束をして、彼と別れた。  
翌日彼はバイトに行った。その日に入るハズだった女の子の代わり  
のシフト。コンビニのバイトだった。

信じられない。コンビニ強盗なんて本当にあるんだ。

浩輔は恐がりだから、抵抗なんて絶対しなかったに違いない。お金なんて素早く渡してドピュンって隠れるよ。

なのに、事は素直には進まなかった。

強盗はコンビニ内の客が退けるのを待つ間立ち読みをしつつも店内を物色し、本来のお金を取るという目的から少し外れて品物に手を出した。

そこを浩輔が見つつけ、声をかけたらしい。

強盗目的で既に緊張状態にあった犯人は、「咄嗟に頭の中が真っ白になって」気付いたら浩輔を刺していた、と言った。

普通に強盗をしてくれていれば。浩輔はお金を渡したのに。刺されなかったのに。

いや、そもそもシフトなんか変わっていないければ。あの場になかったのに。

自分勝手な私は、浩輔が変わらなければ同僚の女の子が刺されていたかもしれない事を気にかけたり、出来ない。

「あさみ」

顔を上げたら光がいた。喪服姿もハンサムだ。

そんな彼が可憐の隣で苦痛に顔を歪めている事が、何だか滑稽だった。

何でここにいるの？ って聞きたくなかった。その言葉を飲み込んだ。サークルの仲間達は皆沈みきった顔をしている。どうしてそんなに暗い顔なの？ って聞きたくなかった。

私にはそんな顔が出来ない。だって現実を認める事が出来ない。浩輔が死んだなんて受け入れたくない。彼ともう会えなくなるなんて考えたくない。せめて浩輔は今もどこかで、あの少し困った顔で眉を下げながら、のほほんとして笑っているって信じたいから、やっぱり暗い顔をしたくない。

なのに涙が止まらないの。  
私の顔は精一杯無表情を保っている筈なのに、涙が止まらないの。  
胸が痛くて喉が詰まって、なぜだか小指が痺れているの。  
どうしよう、浩輔。どうすればいい？

いつもの様に、あの安心できる優しく低い声で、私に教えてよ。

私はいきなり抱きしめられた。

「？」

胸に強く押し付けられた顔を少し力を込めて離し、見上げてみると大樹だった。

大樹は私と同じように、声を出さずにひたすら涙を流し続けていた。目を固くギョツと閉じ、唇を震わせ、鼻は赤くなっていた。

私はそんなもう一人の幼馴染の姿を、すごく不思議な気持ちで眺めていた。

色々あったのに、それにこんな場なのに、彼の腕の中はとても心地が良くてそれが今までの付き合いの長さを彷彿とさせた。嫌でも浩輔を連想させられた。

私達の隣に、大樹の彼女の美樹が立った。仲の良い私の友人。そつと自然に身を寄せ、私達を悲しみいっぱい目の瞳で眺めている。でも私は視界の隅で、サークル仲間に埋もれる形で、みのりが小さく肩を震わせている姿を捉えていた。

浩輔が私を抱きしめている時に呟いた言葉を、思い出した。

私は泣いている大樹の耳元に唇を寄せた。

そしてそつと囁いた。

「浩輔、大樹を殴りたいって言った」

大樹は一瞬動きが止まり、私を抱きしめたまま至近距離で、怪訝そうに見つめてきた。

愛嬌のある人懐っこい瞳が赤く腫れている。その眼が私と浩輔は大好きだった。

私はその瞳を覗きこんでゆっくりと見つめ、そしてもう一度彼の耳に口元を近づけた。

「みのりと話さない。さもないと浩輔が許さない」

驚いたように私を凝視する大樹。戸惑いと不安と、焦りの色が見てとれた。

彼の腕をといで、事が分からず少し不思議そうな美樹の目の前で、私は一言付け足した。

「私も」

事を理解した大樹は、とても悲しそうで苦しそうな表情になった。みのりの事を聞いた時の浩輔の心情を想像したに違いない。浩輔は

とても気持ちの優しい人だった事を大樹は知っているから、辛くて切なくて申し訳ないんだろう。

浩輔。他にやり残した事って、何かある？ 私、何でもやるよ？  
なのに思いつかないの。  
他、なんかあったけ？

会場の片隅で由佳が声を押し殺して泣いているのを、私は当り前の様に一瞥した。

お葬式の事を思い出しながら歩いていたら、いつのまにか目的地に着いた。私は顔を上げる。  
そこは浩輔のバイト先のコンビニ。事件以来閉じたまま。きっと潰れるんだろう。  
入り口脇にひっそりと花がいくつか添えられていた。けどどれも、さほど新しくは見えない。  
今日が彼の四十九日だなんて、きっと誰も気に留めていない。  
持ってきた花束をそっと添えた。

亡くなった人は四十九日までこの世にとどまっっていて、その後天国へ行くんだって聞いた事がある。

私は鞆の中に、彼の形見を入れていた。それは高校の時の地理の教科書。

なんでこれが私の手に渡ったのか、未だによくわからない。実はお葬式の時、浩輔のお母さんが私にくれた物だった。

「あさみちゃん、これ・・・あの子のものなの。貰ってやって・・・」

泣きながら渡されたそれは、その時は自然なものに見えた。

大学の教科書なんて、おばさんには専門的すぎに思えたのだろう。それに比べて高校の教科書はまだ親しみがあがり、私と一緒に彼の思い出を共有できるとでも考えたのかもしれない。

しかも地理は、浩輔が教師として習得しようとしていた学科だった。

小さい頃から地図が大好きだったものね。趣味が高じたね。あ、この場合、夢を実現させた？

させてないじゃん。 ばか。

花を添えた後、私は鞆からその教科書を取りだした。

そうする事で、浩輔と一緒にこの場に立っている様な気がした。

浩輔の笑顔が急に思い浮かんだ。私の隣で笑って、こっちを見ている。

なんか喋らなきゃ。彼と話したい。

だけど、言葉が出てこない。

私は地面の上の花束と手の中の教科書を、交互に見比べた。顔を上げてもう一度隣を見た。

結局浩輔は今どこにいるんだろう？私の隣？それともこの教科書かたみの中？それとも家族が今日行っている四十九日の会場？

パラパラとページをめくってみた。3年前、4年前の浩輔が書きこんだ字やマーカーが各ページから見えてくる。

それが彼から語りかけられているようで、私は切なくなってきた。

「・・・・・・・・」

背表紙の裏。薄汚れたそこには、何かの暗号の様な数字が数個、殴り書きの様に並んでいる。

目を凝らして見て、考えて、頭を捻り、そして思いついた。

涙腺が、決壊した。  
不意打ちだ。ひどい。  
泣けてきた。

この数字は、高3の時の学祭の打ち合わせ時間の羅列だ。  
あの子、メモ帳とか一切持っていなかったから。よく使う地理の教科書裏に書いていたわ。

私と浩輔は同じクラスで同じ委員だったから、私が代わりにメモっても良かったのにも浩輔に任せていたんだ。いつも私があんたの世話をしているんだからたまにはこれくらいやりなさいよ、って言うて。

それで二人で、次の委員会はいつだ、前は遅れただ、と騒いでいたんだ。

浩輔の明るい、全開の笑顔が頭の中に広がった。

バカ、バカ、バカ。あいつはバカだっ。

私はペンを取りだした。

そして教科書裏、その数字の下に夢中で書きこんだ。

「バカバカバカ。デートの約束破るなんて史上最低最悪野郎。あんなキスで抱き締めて、その後放っていくなんで、バカすぎる。コン

ビニなんかで刺されないでよ。ばか。あんたなんか大っ嫌い。

一生隣にいたかった。 一生側にいたかった。

6月3日は必ず会いに来て。夢でも何でもいい。 待っているから。 絶対待っているから。 来なかったら、ぶっ殺す。』

言葉に出すより、教科書コレに書いた方が会話が出来る気がした。

書き終わって、花の隣に教科書を置いた。

改めてみるとあまりにも不自然な光景だった。

ますます胸が痛くなり、私はその場から動けなくなってしまった。

どのくらいそうしていたのだろう。

蒸し暑い中にも気温が下がって行くのを感じた。 空気が変わっている。空を見上げた。雨でも降るのかな？

再び足元に置いた教科書を見た。雨が降ったら、やっぱり濡れるんだらうな。

「読んだよね？」

今度はやっと口に出せた。もちろん、浩輔に。

「しつかり読んだよね？・・・約束、絶対守ってね？」

一呼吸、間を置いた。

「じゃ、持って帰るから。お花はあげる。きれいでしょ」

言いながら教科書を拾い上げ、鞆の中にしまった。

そして私は歩きだした。

駅にいる人達は多くもなく、少なくもなく、だった。もうすぐ帰宅の人達が増えてくる。時計を見たら3時半過ぎだった。浩輔が世の中から消えても、それでも世界は周っている。人は生活しているし、電車は動いているし、テレビもいつも通りだった。なんでだろう？

駅のアナウンスが、もうすぐ電車がやってくる事を告げる。総武線下り電車。

その時、急に私の心臓が大きく跳ね上がった。それはまるで肋骨を叩くかの様な動悸だった。

顔が痺れていくのを感じながら、私は上を見上げた。駅名を確認する。

『信濃町』

息が止まった。

顔の痺れに加え、耳鳴りまでしてきた気がした。心臓は激しすぎて肋骨を壊しそうだ。

- 信濃町の、総武線のホームにいたでしょ？ -

- 駅であさみが泣いているのを見たんだよ。だからビックリして来たんじゃないか -

私は体を折り曲げた。人目を憚らず声を上げて泣いてしまった。今度は先ほどと打って変わって、声を出す事が止まらない。

そっだよ、浩輔。私はここにいるよ？　ここで本当に泣いているよ

？ みんなの注目、浴びてるよ？

あなたの言った事は本当だった。見間違っても何でも無かった。ただちよつと、時間がずれていただけ。

あなたの目は確かだった。泣いているのは私だった。だから来て。ここに来て。

お願いだから、私の事を、

「・・・助けてっ・・・」

私の口から出た言葉は、激しい嗚咽に混じって情けない響きを持っているだけだった。

助けて、助けて。浩輔。

体を折り曲げるようにして泣き続ける私に、駅の人達はかなり驚いていた。不思議そうにしている人や気味が悪そうにしている人、興味津々の人など色々な事が顔を上げてみなくてもよくわかった。それでも泣く事が止まらない。

やがて電車がやってきた。人が降りてくる。私は思わず期待を込めて顔を上げた。

そこには浩輔の姿は無かった。

当り前の事なのに、絶望感が体を襲う。浩輔が死んでしまった事を真正面から受け止めようとしてこなかった私は、今になって地面に埋もれてしまいそうなほど打ちのめされている。

電車の中の人達も訝しそうに私を見ている。

降りる人も乗る人も、邪魔な私を必要以上に避けて通る。

それぐらい、駅での私は浮いている。

そして先程まで激しかった動悸は、鼓動を打ち過ぎたせいなのか今度は今にも止まりそう。

苦しくて苦しくて息が出来ない。

助け、て。

自分にも聞こえないぐらいの、小さな小さな声しか出なかった。  
電車のドアが閉まるアナウンスが耳を掠める。

このまま心臓が止まってしまったら、浩輔と会えるのかな？

そんな事が一瞬頭をよぎった。

無意識に顔を上げた。

その時

私の胸は大きな衝撃を受けた。

電車の中の浩輔が、驚いた様な顔をしてこちらを凝視していた。

私は息も涙も止まってしまい、目を見開いて彼を見つめた。

浩輔が本当に乗っている??!!

電車のドアがもうすぐ閉まる。

「行かないでっ!！」

私は咄嗟に叫ぶけど、目は浩輔に釘付けで頭は混乱している。  
電車の中の浩輔も私を見つめたまま動揺している。

全てがスローモーションのように見える。

私は頭の中で彼の言葉を反芻していた。

今までの状況が、まるでカーレースの様に次々と頭を走りぬけて行った。

浩輔は信濃町の総武線ホームで泣いている私を見たと言っていた。

私は今、まさしくその場所で泣いている。

そしてあるう事が、浩輔の姿を今見ている。

電車の乗客に埋もれる様にして、信じられない顔つきで私を見る浩輔の姿は幻なのだろうか？

私は幻覚を見ているのだろうか？

幻か現実か、私には判断をする時間が無かった。

電車の扉が今にも閉まる。  
私は直感した。

今、私の目の前で、過去と現在が繋がっているんだ！！

「浩輔っ！！！」

咄嗟に私は駆け出した。でも電車に駆け込むにはあまりに遠い。  
すでにドアは半分以上閉まりかかっていた。  
止めねば！！彼に知らせねば！！

「行っちゃダメ！！！」

間に合わないっ！  
そう思った私は無我夢中で、手にしていた鞆をほとんど閉まりかかったドアに向かって投げつけた。  
何とかして閉まるドアを止めたかったし、何でもいいから過去の浩輔に働きかけたかったのだ。  
鞆は閉まりかけた電車のドアに無残にもぶつかった。  
鞆の口から中身が、電車外にも線路の下にもバラバラに散らばった。  
電車のドアは非情にも、まるで物をぶつけられた事に気づきもしないかの様に当り前に閉まりきった。

「何をやっているんですかっ?」

若い駅員さんが驚いて駆け寄り、私を羽交い絞めにした。

電車に物を投げつけたのみならず、走り出そうとする電車のドアを私が叩こうとしたからだ。

「バイトに行っちゃダメ!!」

私はまるで悲鳴の様に、声の限りに叫んだ。

電車の中の浩輔は驚いて目を見開き、必死にこちらに来ようとして  
いる。

わずかに耳を傾け「え?」と言っている様だった。

驚いている彼の口が動く。あさみ?

そんな彼を乗せて、電車は加速する。

「浩輔っ!!」

私は電車を追いかけてようとしたが「やめなさいっ」と言う駅員さん  
に掴まれたまま動けず、ひたすら叫び続けた。

「バイトに行っちゃダメ!!浩輔っ!バイトに行っちゃダメ!!」

電車が遠のいていく。狂ったように叫んでいたけど、電車はやっぱり何も聞こえていないかの様。戸惑いすら見せずに走り去って行った。

「浩輔っ!!」

ついに電車は見えなくなった。

そして私は興奮したまま。

電車は行ってしまった。でもひょっとしたら、まだ過去と現在が繋がっているかもしれない。だとすればどうすればいい? どうすれば浩輔と話ができる?

早くしないと、時間が途切れちゃう!! 時間切れになっちゃう!!

そっだ、電話!!

私は駅員さんの腕を振り払い、線路に落ちた鞆の残骸を捜した。

小物が沢山線路に落ちていたが、大きな鞆はドアに跳ね返ったのかホームに落ちていた。

線路に散らばった自分の持ち物の中に携帯電話が無い。急いで鞆を

拾い中を確かめると、すぐに携帯が見つかった。

私は浩輔の携帯番号を出した。  
祈る気持ちで通話ボタンを押す。

お願い、繋がって。

「お願い、お願い、お願い」

繋がって。繋がって。繋がって。

周りの注目や駅員の不機嫌な声を無視して、ひたすら祈り続ける。  
だけど耳に聞こえてきたのは、あまりにも無情な言葉だった。

お客様がおかけになった電話番号は、現在、使われておりません。  
番号をお確かめになって・・・

「やだっやだっやだっやだっ」

信じる事が出来ない。というか、受け入れる事が出来ない。

再び電話をかける。口はひたすら同じ言葉を吐いている。やだやだ  
やだやだ。

心の中ではひたすら祈っている。お願いお願いお願いお願い。

それでも聞こえてくるのは同じ台詞。

「やだあ、やだあ、お願い」

腕の震えが止まらない。

それから私は何度も何度も、彼に電話をかけた。

駅員の説教も無視して、涙をこらえながら何度も電話をかけた。だ  
けど繋がる事は無かった。

考えてみれば電話が繋がった訳ではない。ここで彼を見たんだ。

そう気付いた私は、今度はその場から動く事が出来なくなってしま  
った。だってもう一度、もしかしたらここで、時間が過去と繋がる  
かもしれない。

私は立ちすくんだ。

結局私は、夜の10時過ぎまでその場に居続けた。

最後は諦めた駅員に、何故だかすごく同情をされて。

「……お嬢さん。もう帰りなさい」

いつのまにか年配の駅員さんが、静かな声で私に言った。私の鞆を差し出している。私はそれを黙って受け取った。妙に軽い。中を覗くと浩輔の教科書が無かった。

慌てて周りを見回す。線路を覗き込む。どこにもそれは落ちていない。

「どっしたの？」

「教科書が無いんです」

私は必死の形相でその人に言った。

「彼の形見の、地理の教科書が無いんです」

その時、駅員さんの顔が少し歪んだ。今日一日この駅を騒がせた私の行動の原因を、今初めて少し理解した、という表情だった。憐みと、少しの切なさが見てとれた。

「ここには無いよ。・・・見つかったら、必ず連絡するから」

浩輔、教科書持って行っちゃったのかも。

私は彼の顔を眺めながら上の空で考えた。  
だってあれは、あの子のお気に入りだったから。

もう帰らなくちゃいけない。でも帰りたくない。この場から離れたく、ない。

まるで、忠犬八子公だな。

そう思った瞬間、ふいに笑いがこみあげてきた。

だって忠犬八子公って、ビジュアル的にも性格的にも、雰囲氣的にも私より浩輔の方でしょ？

なのに私が犬なんて。健気にご主人の帰りを信じているなんて笑っちゃう、ここ渋谷じゃないし。

それに八子公って、毎晩諦めて家に帰っていたんだよね？ 犬でも諦めるのに、私、こんな時間まで何しているんだらう？

・・・代わりに毎日通っていたんだっけ、あの犬。

・・・じゃあ私は、いつまでここに通い続けるのだらう？

いつか、通う事を諦めて、そして浩輔を諦めるんだらうか？

そう思ったら、また涙が溢れてきた。

浩輔を諦めるなんて、怖い。

でもきつと、私は浩輔と会う事を諦めてしまふのだらう。

せつかく、今日、会えたのに。

彼に、キッチンと伝える事が出来なかった。

電車のドアが閉まる前に私が彼に伝えられた言葉は、浩輔、助けて、行かないで。

浩輔があの時言っていた台詞と同じじゃん。

あの後彼は、私と一緒に女の子を捜して、

そして次の日、刺されて死んじゃうんだ。

私がちゃんと伝えられなかったばかりに!!!

そう言えば「好き」も伝えていない。

私はその場につずくまっってしまった。

重い脚を引きずるようにして家に帰ってきた。

家の門を開けようとして、そう言えばあの日浩輔をここで見送ったな、とか思ってたまた涙が滲みそうになった。

「・・・ただいま」

習慣になってしまった「ただいま」は、どんなに気分が落ち込んでいても口をついて出てくるらしい。

一瞬の間を置いて、居間から妙にのんびりした声が聞こえてきた。

「おかえりー」

お母さんの声だ。

「ご飯はー？」

「・・・食べてきた」

食べたくない言い訳をするのが面倒で適当に誤魔化す。

「シャワー浴びる」

「はいはーい」

いつも以上にのんびりした返事をするお母さんは、でも居間から顔を出してこない。

今日が何の日か知っているから、私が遅く帰ってきてても多分何も言わないんだ。

私はそのまま浴室に直行すると熱いシャワーを浴びた。

そしてそのまま家族の誰とも顔を合わせずに自室に引きこもった。

今度はベッドに直行する。ブランケットを頭から被った。うわ、あつい。

今となつてはあの時見た浩輔が、自分の願望が作り出した幻の様な気がして来た。

過去と現在の時間が繋がるなんて、そんなSF見たいな事、ある訳がないもの。

あれは狂った私の頭が造り出した幻想。愛しい人の、幻影。

だとしたら、神様。

もう一度、彼の姿を見せて下さい。

夢でもいいですから。

お願いします。

なのに何の夢を見ていたのかも定かでない。

きつと夢見が悪かったのだと思う。揺すぶられて起きた時、かなりの頭痛がした。

「んー・・・イタタタ・・・」

顔をしかめて見上げると、浩輔が眉毛を下げて覗きこんでいた。

「まだ寝てるの？」

ああ、よかった。浩輔がいる。私の願いが届いたんだ。

私はすぐくすぐく、嬉しくなった。本当に本当に、嬉しくなった。

「うん。もう起きるよ。だって遊びに行くんだものね？」

満面の笑みと共に体を起こして彼に応えようと、彼は何故だか面喰った様な顔をした。

「・・・どうしたの？ そんな素直で」

「だって嬉しんだもん。やっと浩輔とデートが出来る」

「え？ やつと？」

戸惑った表情を見せた彼は、その後照れたように顔を赤くした。

「あさみ、そんなに俺の事好き？」

「うんっ。すっごい好きっ!!」

私の笑顔全開に浩輔は、今度こそ顔中を赤くしてあるう事が思いきり目を反らした。  
「というか、瞳がうるたえている。キョドってる。」

「うわ、かわいい。」

私はガバツと彼に抱きついた。  
彼は私に首からぶら下がられ、バランスを崩してベッドの上に両腕をついた。

「だから私のお尻は再びベッドの上。  
浩輔は前屈み状態。」

「ちょっと、あさみ」

「ふふふ」

「アタフタする浩輔が面白くて、鼻を彼の首筋に摺り寄せ、思いきり彼の匂いを堪能した。」

「ああ、嬉しいなあ。こういう香りだったわ、うん。懐かしいなあ。というか私、ここまであからさまに浩輔に抱きついた事ないんだっ  
た。」

「匂いなんて、なおの事。」

「ふふふじゃないよ。これはアブナイって。おばさんに見られたら」

どうするの？せめて上になんか着てくれよ。」

「着てんじゃん、Tシャツー」

「そんなの着てるうちに入んねえだろ」

「ござとばかりに私は思いっきり彼に甘える。もう嬉しくってしょうがない。」

すると浩輔は私の肩におでこをコツンと乗せ、そして黙ってしまっ

た。しばらくして少し掠れた声で呟いた。

「当たるんだよ。・・・マジで勘弁して。それとも拷問プレイ？」

当たるって？・・・あ、胸が？ そっか。ブラ着けてないもんね。・・・随分リアルな事を言うな！。設定、細かいな！。そんな浩輔も脳内で造りだしちゃうとは。

・・・て、あれ？

ちよつと待つて？

私は腕を緩めた。

それから緩めた腕で彼の肩を掴み、グイッと引き離して彼の顔を覗き込んだ。

彼は少し驚いた様に見開き、そして同じように私の顔を覗き込

み、再び困った様な顔をした。

「あ、ごめん？ 怒った？」

それでも私が真剣に視線を合わせ続けるものだから、次に彼は怪訝そうな顔をした。

「……どしたの？ 俺そんなヤバかった？」

そーゆー事を、そうやって普通に可愛い顔で訊くかな？

という突っ込みは心の中に留めておいて、私は口を開いた。

「……本物？」

「……え？俺の偽物がいるの？」

浩輔はますます目を丸く見開く。私はそんな彼の瞳を見つめ続け、次に彼のほっぺから唇から首から肩から胸から、手の平でくまなく触りまくった。

リアルだリアルだリアルだ、すっごくリアルだ！！

あまりにもリアルすぎて、かえって実感が無い。状況が呑み込めない。

私は今度こそポカン、として、彼に間抜けに質問をした。

「本物なの？」

「・・・だと思っけど」

「え？何で？どう言う事？」

「え？何？わかんない」

浩輔は困った様に眉毛を八の字に下げて、ああこれは見慣れた表情だ。

「俺、偽物なの？」

「・・・それ、私に聞くのっ？」

ここで一気に、自分の存在にすら自信を無くして私に聞いてきちゃうあたり、浩輔なんだよなあ。昔からこの子はいつもこんな感じでもともと呑気で、その実、肝が太かった。

「・・・浩輔、何でここにいるの？」

「だってデートの約束したじゃん」

彼が少し拗ねた様に口を尖らせて答える。当たり前のように。

私は急に、鼓動が激しく胸を打つのを感じた。

「・・・今日がいつか、分かってる？」

「え？日付？んーと・・・6月3日？」

6月3日?!

それって浩輔が刺された日だ!!

そんなわけないでしょ？ 今日7月22日？ 23日？ それぐ  
らいのハズよ?!

私はガバツと、今度は両手で浩輔の顔を挟んだ。思いっきり、ギユ  
ーっと。

「あしゃみ・・・」

タコ唇になる浩輔のほっぺはメチャクチャ弾力があって、やっぱり  
本物に見える!!

そんなバカな!!

私はベッドから飛び出すと浩輔を放って、バタバタと階段を駆け降  
りた。

「お母さん、お母さんっ!!」

大声を出しながら居間に飛び込む。

お母さんは座って本を読んでいた。私の剣幕にびっくりして呆気に取られていた。

「何、どうしたの？ そんなに大騒ぎして？」

「浩輔がいるっ!!」

するとお母さんは、呆気にとられた顔のまま固まった。

ああやっぱりこれはあり得ない非常事態なんだっ！

私は顔から血の気が引いていくのを感じた。

「どうしよう、すっごく弾力があってリアルなの。どうしよう、私  
があんなにお願いしちゃったから化けて出たのかもっ」  
「……え？」

私のあまりの台詞に、お母さんは少し顔を突き出した。

「何を言っているの？」

「だってすごく本物っぽいんだものっ。うっん、本物なんだものっ。どうしよう、私の部屋にいるのっ」

「え？ 通しちゃいけなかったの？」

「そうじゃないけどっ、…………え？」

今度は私が固まった。今、何て言った？

「通しちゃいけなかったの、って…………お母さんが通したの？」

「そうよ？ いつもの事じゃない。それとも何かあったの？ 喧嘩でもしたの？」

お母さんは少し難しそうな顔をした。

「だったらそう言ってくれないと。わからないから通すじゃない。浩輔君、いつも通りだったから」

何ですって?!

私は頭が混乱した。その場に立ちつくした。

えっと、えっと、これはつまり…………どういう状況だろうっ？

「でもあさみ、いつまでそんな恰好でいるの？ いくらなんでもマズイんじゃない？ 浩輔君だって困るでしょ」

「…………お母さん、今日、何日…………？」

「今日？6月3日でしょ？」

「……何年の？」

「？平成？西暦？20xx年でしょ。どうかしたの？」

信じられない。

昨日までより、時間が一カ月半も戻っている。  
嘘でしょ？

私はお母さんを凝視した。この人は、こういう悪い冗談に乗っかる  
様な人じゃない。  
どうということ??

つまりそれは、つまり、つまり、  
つまり私は……

「……部屋に戻ります……」

「浩輔君に出てもらって、ちゃんとした服に着替えなさい。みつと  
もないわよ」

「……」  
「それから、あんまりいちゃつくんじゃないわよー」

無言で部屋を去る私に、お母さんがからかいの声をかけた。  
いつもの私なら真っ赤になるだろうけど、今は完全に、無視。声が  
出ない。

自分の部屋の前で、急に息苦しくなった。  
どうしよう。全てが冗談で、幻だったらどうしよう？

呼吸が、出来ない。

そつと扉を開ける。

浩輔は、私のベッドの上に腰かけて、ボーっと座っていた。

「あ、戻ってきた」

私に気づいて、ふわっと笑る。

「どしたの？ 用事終わった？」

いつもの浩輔。いつもの微笑み。私は急に込み上げてくるものがあった。

慌てて時計を見る。午後3時。

あの日、浩輔が刺されて息を引き取ったのは午前11時半過ぎだった。

た。

・・・今までのアレは、全部悪い夢だったんだ。  
夢だったんだ！！

「あさみ・・・」

私は泣きだしてしまった。戸口に立ちつくす。涙が後から後から溢れ出て来た。止まんないよお。

浩輔が立ちあがって近づいてきた。  
私は彼のTシャツを小さく掴んだ。

そうして、もう一度呟くように確かめた。

「本物、だよな？」

「・・・うん」

浩輔は優しく返事をする、私の頭を柔らかくポンポンと撫でた。

「私ね、夢を見たの。ううん、見ていたの。」

私は俯いて、掠れた声で彼に言った。

「浩輔がコンビニで強盗に刺されちゃうの。それで死んじゃうの。私は悲しくって、ずっと泣いていたの。そしたら、ね。信濃町のホームで、死んじゃった浩輔が電車に乗っているのを見たの。．．．そう、浩輔がホームで見たのは私だった、って言う設定。」

声が震える。喉が詰まる。嗚咽が漏れる。

だって、あの時の状況と感情が一気に蘇ってきたから。

なのにおかしいの。笑っちゃうんだよ。私、笑えているの。

私はまさしく泣き笑いの顔を上げて、浩輔を見た。

「あんまり浩輔が騒ぐから、私、夢に出てきちゃったじゃん」

悲しかったの。悲しかったの。私、すっごく悲しかったの。

思い出しただけで泣けちゃうくらい、すごく悲しくて、長い夢だったの。

ところが途端に、浩輔はとても険しい表情になった。何故だか眉間にしわを寄せて私を見ている。

そしてとても真剣な声色で問いかけてきた。

「あさみ。その時、何かした？」

「え？」

「俺に向かつて。何かした？」

何かを求めている様な、射る様な強い眼差し。

私はその瞳の光にドキンとするとともに、その表情に少し恐くなつた。

心に緊張が走る。

「何かつて・・・泣いた」

「それで？」

「・・・叫んだ」

「それで？」

「・・・もの、投げた」

「もの？」

「・・・うん。鞆。電車にぶつかって、中身がバラバラになっただけだけど」

何となく息を飲みながら私が言うと、浩輔はしばらく私を見つめ続け、それから無言で離れた。

そして床に置いてあった自分の鞆を拾い上げ、中から何かを取りだした。

「これも、投げた？」

それは浩輔の、高校の地理の教科書だった。私は何が何だか分からない。

「あ、え？ え？ そう、それ、あの時無くして・・・え？」

浩輔がそれを差し出す。私は混乱したまま手に取った。

「そう。これ。裏に・・・え？」

背表紙の裏を開き、私は今度こそ本当に息が詰まった。

「・・・何、これ」

そこに書いてある殴り書きは、私があの時、コンビニの前で綴ったまさしくアレだった。

浩輔の、49日の時に、彼に語りかけたくて書いた言葉。

でも待って？ 今日6月3日で、もう3時で、浩輔は生きているんでしょ？！

ちよっと待ってっ？

「これは何??!?!」

私は教科書を凝視したままそこから視線が反らせない。腕が震えてきた。心臓が止まりそう。

やっとの思いで浩輔の顔を見上げた。

「どう言う事？」

「それ、俺が聞きたいんだけど」

「これって・・・」

「あさみの字だよな？」

「・・・多分・・・でもいつのまに・・・」

「いつ書いたの？」

浩輔は険しい顔で、眉根を寄せながらもう一度私の顔を覗きこんだ。こんなに真剣で厳しい表情の浩輔は初めて見たものだから、正直、恐くなってくる。

心臓が止まりそうだったのに、今度は鼓動が激しく胸を打つ。それは浩輔の顔が怖いからなのか、このあり得ない状況に大きな不安を感じるからなのか、

それとも彼の顔がこんなに間近にあるせいなのか。

「それに何で、あさみが俺の教科書持ってんの？ 俺、貸したっけ？」

「・・・覚え、ない」

「どう言う事？」

「・・・だって・・・夢の中では、おばさんがくれたんだもん。浩

輔の形見に、って。それで私、それを貰って、それで……」  
「ここにこれ、書いたんだ？」

そう言っただけは、私が持っている教科書に視線を落としたり。  
私もつられてそれを見た。私の殴り書き。

「……うん。でもあり得ない……」

あり得ない。自分で言葉にしたら益々受け入れ難くなってきた。この状況が。

……あり得ない！

「……今日さ」

浩輔は俯いて教科書を見ながらボソツと言った。

「バイト先のコンビニで、万引きしたヤツが警察に捕まったんだ」  
「え？」  
「そいつ、ナイフ持っていたって」

彼の言っている事を咄嗟に理解出来ない。私は一瞬黙り込む。そして次に驚愕した。何ですって!!!??

浩輔は私から教科書をそつと取った。そして顔を上げて私を見つめた。

その顔はまだ真剣だったけど、目には少しの戸惑いの色があった。

「俺昨日、あさみがあんまり否定するもんだから、なんか気が引けて言わなかったんだけど・・・これ、駅であさみから・・・て言うかその女の子からぶつけられた」

そう言って私を見つめたまま、軽く教科書を持ちあげる。

私は再び啞然とした。自分の目が大きく見開かれているのがわかる。息が止まった。

嘘でしょ？

「中身読んで最初驚いて、何の事かさっぱりわかんなかったんだけど、目の前のあさみが知らないって言うのウソついている様にも見えなかったし。そんでこの6月3日って何だろう、って。あと、コンビニで刺されるってやつ」

そう言った彼は軽く肩をすくめながら、少し苦笑した。

「だからかな。今日おかしな奴を見た時、俺、いつも以上にビビっちゃった。こいつヤベーって。警察呼ぶだろ、俺勝てねーって」

そして真顔で私を見た。

「もし、ナイフなんかもっていたら。俺、死ぬのかって」

私は、時が止まった様な感覚に襲われた。

頭の中がフリーズしているのに、色んな事が一気に押し寄せてくる。写真か何かの様に。バラバラに。次から次へと。私の頭を駆け巡った。

浩輔が教科書の走り書きを読んだ。私が駅で泣いていた。誰かが教科書を投げた。強盗がナイフを持っていた。浩輔が刺されていない。私が教科書に書いた。誰かが昨日駅で泣いていた。浩輔が教科書を読んだ。浩輔が警察を呼んだ。浩輔が刺されていない。刺されていない。刺されていない。

今日は、6月3日。

「どっちが夢だろ？ ホントの俺ってもう死んでるの？」

浩輔が、それこそまるで夢を見ているかのような表情で呟いた。私はそれを、まるで夢を見ている様な気分で聞いていた。

「よくわかんないや。ホントって何？・・・でもあさみの泣き顔が脳裏から消えなくなつて」

眩しいものを見るかのように、目を細めて私を見つめる。彼の綺麗な手が、そつと私の頬を撫でた。

「だから俺にとっては・・・それは事実で」

私は潤んだ瞳で、彼の揺れる瞳を見つめ続けた。

ついに涙腺が決壊した。

私が咄嗟に取った行動が彼に届いたの？ それを浩輔が読んで、現在いまが変わったの？ ううん、現在いまじゃない。だって私は6月3日に戻っている。

じゃあアレは全て夢だったの？  
じゃあなんで今、浩輔がこの教科書を持っているの？ そしてその中には何で私の手紙があるの？

何にも解らない。なのに涙が出てくる。  
だって浩輔が目の前にいる。浩輔がいる。

「・・・浩輔がいるー」

彼の胸に抱きついた。Tシャツが私の涙で濡れるけど、そんな事気にしてあげない。思いつき縋りついた。

「もうそれだけで、どうでもいいー」

何が本当かなんて、関係ない。仮に今が夢でも構わない。この狂った状況が何なのかなんて考えない。  
浩輔に会いたかった。浩輔と話したかった。浩輔の声を聞きたかった。浩輔に触れたかった。  
それを今、私はしている。それだけでいいの。これだけでいいの。

だって現実の世界でもいつも、先の事はわからないじゃない。

「あー、えーっと、・・・泣くなよ」

困った様な彼の声が頭上から聞こえてきた。ためらいがちに私の背中をポンポンと叩く。

私はそんな彼を無視してしがみつき、涙を流し続けた。彼はそつと私を抱きしめてくれた。

たまらなくなる。私は今、浩輔の腕の中にいるんだ。

「可憐やみのりにはもっと気の利いた言葉が言えてたー」

「だってあれは・・・あさみじゃないし・・・」

「意味わかんないー」

「・・・あさみに泣かれたら、俺困るよ」

浩輔の、時折聞かせてくれる、よく通る低い声。

私はその心地よい声にひかれて、顔を上げた。

浩輔は困った様な、だけど切なそうな眼差しで私を見つめて、そして言った。

「どうしていいか、わかんないよ」

しばらくそれを眺めて、私はプツと嘔き出してしまった。

「やっぱり浩輔だー。どこまでもヘタレてるー」

「何だよそれ」

「ヘタレキングー」

「あはは」

きつと目を真つ赤にしたまま、私は笑っている。一緒に楽しそうに、浩輔も笑っている。

こんな光景、想像していなかった。いつも願っていたけれど、ここまで素晴らしいものを思い描いてはいなかった。

「浩輔」

私は笑いながら言った。

浩輔は私の頬に手をやりながら、愛おしそうな表情でそれに答えた。

「ん？」

「途中でゾンビになっちゃったり、しないよね？」

「……は？」

浩輔の手が止まる。

口が開いて、目がまん丸になった。

私はそんな彼を見つめて、うん、これって演技に見えないけどさ、でもね、だって一応確認しておかないと。

「映画とかでは、一度死んだ人間ってよくなるじゃん、ゾンビに。それで性格もすごい変わって、生きてる人とかを食べちゃうじゃん」

「……え……ちよつと……」

「浩輔、ゾンビにならないよね？私の事、食べないよね？」

「……どんだけ好きなの？ホラー映画……」

益々下がった八の字眉、この顔、大好き。

これが見たくて、小さい頃よく苛めたっけ。

あ、その力が抜けたように肩を落とす仕草も、実は大好きなんだよ。

「アメリカ映画の見過ぎでしょ。ていうか俺、一度も死んだ覚えないし」

「じゃあ日本映画だったら、生き返って何日かしたらまた天国に帰っちゃう。浩輔、帰らないよね？」

「・・・ねえ、俺、どういうリアクション取ればいいの？」

下唇を突き出して少し拗ねたように上目使いで私を見る表情、もう、すっごく好き。

でもね、そんな表情が許される男なんてあなたぐらいだし、10年後にそれやったら許されないよ、覚えといて。

「安心しろ、心配するな、あさみ。って言えばいいのよ」

「あ、そうか。よし・・・安心しろ！ 心配するなあさみ！」

わざとらしく大袈裟に、キリツと睨みを利かせて男らしく言ってみせるもんだから、

それがあんまりにも似合わなくって、やっぱり二人で大爆笑をします。

なんて素晴らしいんだろう。好きな人と一緒に笑うって言う事は。大好きだよ、浩輔、大好き。

すると急に、彼は私をすくう様にふわっと抱きしめてきた。  
そして私の顔を覗き込んで嬉しそうに言った。

「ずっと一生、側にいんだろ？」

微笑んでいる瞳は堪らない程優しく、それを見た私は、嬉しさと共にドキツとした。

「……うん」

「一生一緒にいるんでしょ？」

「うん」

「……じゃ、よろしくね」

そう言っつて小首をかしげてにっこり笑って、なんて可愛い顔をするのズルイじゃない。  
女の私よりずっと可愛くて抱きしめたくの。あなたの事を抱きしめたくなるの。

「うん。よろしくね」

私は精一杯明るく、そして負けなくらい可愛く微笑んでみせた。  
勝敗の程は不明だけど。  
すると彼はその微笑みそのまま、にこりと聞いてきた。

「で、触っていい？」

「は？」

「さっきから俺の胸下にガンガン当たってる」

可愛い笑顔を崩さずに言うものだから何を言っているのかさっぱり分からず、気付いた時には彼に腰をがっしりと抱きしめられて逃げ場がなかった。て、ちよつと。

「・・・なっ」

「結構我慢したぞ。触っちゃえばよかった」

いつのまにやら彼の顔はすっかり男の子のものに戻っていて、悪戯っぽくでもどこか艶っぽく瞳が輝く。

なもんだから私は益々真っ赤になってしまっ。

「な、だってお母さんにはれたらヤバいって自分が」

「あさみが大人しくしてれば大丈夫じゃない？ちよつとくらい」

そしてあつという間にベッドの前。彼に軽く押されて私はベッドに腰掛ける形になった。

更に顔を赤くしてうるたえながら浩輔を見上げる。

「ちよつとつてどこまで」

「ちよつとそこまで」

そう言って彼は私の頬にキスを落としてきた。それをそのまま耳朶にまで滑らせ軽くそれを舐め上げると、なぞる様に唇が首筋を下りてきた。

その甘すぎる感覚に体中がゾクゾクする。今までとは違った意味で、

涙が滲み出てきた。

浩輔の、キスだ。

「一生、離れんなよ？」

再び耳元に戻った唇が、熱い吐息と共に囁いた。

私達は見つめ合う。お互いの瞳が絡みあって、多分もうほどく事は出来ないの。

離れないよ、当たり前じゃん。

深く深く、口づけをした。息もつけない程キスをして、お互いの存在を確かめ合う様。

そして体の奥で火がついた欲望は、しばらく止める事が出来なさそう。

「最高、愛してる」

どっちの台詞かも分からない。夢中になって二人とも気付く事が無かったから。

この後二人でデートをしよう。博物館に行つて、秋葉原にも行つて、池袋で服を見てもらおう。

由佳に会って、からかおう。山下くんダッシュとどうなったか。可憐に会って、元気づけよう。可憐はとってもいい恋愛をしたって。みのりに会って、抱きしめよう。私達は一生みのりの味方だから。その後二人で大樹を殴りに行くぞ。

そして二人で、幸せになろう。

これから起こるであろう様々な事に、二人で乗り越えられる様に。今から幸せになる準備をしよう。

一体、誰に感謝をすればいいんだろう？ 神様に？ 仏様に？ 運命に？ 偶然に？

それとも、戻ってきてくれた、浩輔に？

誰でもいいや。ありがとう。

私はこの一ヶ月半、死ぬほどあなたを呼び続けたの。今まで一緒にいた14年間を足し合わせても足りないくらい、必死であなたを呼び続けたの。そしてそれを聞いてくれた何かがいるって、信じている。

だから、

ありがとう。

私の声を聞いてくれた人へ。  
ほんとうに、ありがとう。



10 (後書き)

完結です。読んで下さって、ありがとうございました。

今回の主人公ちゃんは、あまり何かを頑張った感じはしないかな？

でも必死だった事と思います。如何でしたでしょうか？

中編は短い中で起承転結を目指すので、なんだかドラマチックになりがちですね。

このお話が、皆さまの暇つぶしに役立った事を願っております。  
次作も宜しくお願い致します。

戸理 葵

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5808q/>

---

Callin you

2011年2月22日20時35分発行